口絵

5－2－A ①

5－3－A ①

5－4 ①

5－3－A ④

5－5 ①

6 ⑦

（内側の文様を拡大）

5－7 ①

7－2 ⑩

文化資料館調査研究報告(21)：01-56, 2012

県指定史跡　堤貝塚（1982 年調査）出土資料の整理報告

（堤 2719 番地付近下水道布設工事関連調査）

考古資料整理グループ*

はじめに

堤貝塚（茅ヶ崎市遺跡台帳の№.８遺跡）は小出川の支流の駒寄川上流、標高 30 数mの台地に立地する縄文時代の遺跡（第１図）で 1938（昭和 13）年から９回の調査が行われ、西側の遺跡の一部が 1992（平成４）年に神奈川県指定史跡となっている。

調査の経緯は次のようである。

第１回の調査は 1938（昭和 13）年、第２回は 1939（昭和 14）年で、いずれも赤星直忠氏により東貝塚の調査が行われている。住居址らしき跡、貝層、土器と釣針、２孔ある鯨骨などが発見されている。

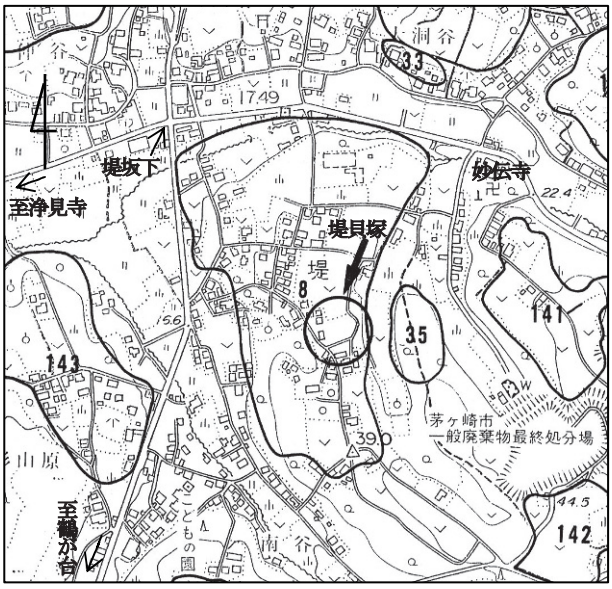
第３回は、第二次大戦後間もない頃、鎌倉中学校（現鎌倉学園）の生徒たちが西側斜面を一部発掘したようであるが報告がないので不明である。

第４回は 1959（昭和 34）年、第５回は 1962（昭和 37）年に調査が行われ、岡本勇氏が「『堤貝塚』文化財資料第二集」に報告されている。土器（朝顔形深鉢、完形に近い甕形土器などを含む）、骨角器、牙製品、貝製品、石器、土錘などの写真、図などが掲載されている。＜第４回、第５回の出土品についての詳細報告書：考古資料整理グループ　2008「茅ヶ崎市文化資料館調査報告 16『神奈川県指定史跡　堤貝塚』（1959、1962 年調査の出土資料整理報告）」＞

第６回は 1979（昭和 54）年に調査が行われている。＜報告書：考古資料整理グループ　2000「茅ヶ崎市文化財資料集 第 13 集『神奈川県指定史跡　堤貝塚』」＞

第７回は 1982（昭和 57）年に岡本勇氏により調査が行なわれたが、詳細な報告はされていない。

第８、９回は個人住宅改築のための調査で 2000（平成 12）年に行われている。



第１図　堤貝塚の位置

第７回調査の遺物について、今回報告する。

報告の構成

第１章：調査について
第２章：土器
　第 １節：縄文前期
　第 ２節：縄文中期
　第 ３節：称名寺式（第３～6 節は縄文後期）
　第 ４節：堀之内１式
　第 ５節：堀之内２式
　第 ６節：加曽利Ｂ式
　第 ７節：型式の特定できない土器
　第 ８節：注口土器
　第 ９節：把手部・突起部
　第 10 節：土器底部
　第 11 節：古代以降の土器
　　土器観察表
第３章：土器片錘
第４章：石器
第５章：貝層のはぎとり

第１章　堤貝塚の調査について

今回の資料整理は、堤貝塚にある公道で行われた昭和 57（1982）年の下水道管の取り替え工事に伴う遺跡調査について行った。調査に関する資料は昭和 57 年度「茅ヶ崎の社会教育」（茅ヶ崎市教育委員会）に掲載された報告があり、以下に全文のまま転載する。

堤西貝塚の応急調査

茅ヶ崎市は昭和 57 年度事業の一環として、堤 2719 番地付近一帯の下水道管取り替え工事を計画した。しかし、その一部には堤貝塚の貝層の存在が予想され、さらに貝塚に伴う遺物包含層や生活遺構の存在も十分に考えられた。市教育委員会はこれら埋蔵文化財の存在を考慮し、下水道部との協議の上、文化財保護委員の岡本勇氏に調査を委託した。

調査は、工事の性格上、工事と併行して行なわざるを得ず、また遺跡保存の考えから最小限の範囲に留めたため、困難な点も多かった。試掘溝は下水道管を中心に幅 1.5m で行ない、約 34m を主体的な調査区として設定した。調査の結果、ダンベイキシャゴを中心とする多量の貝（純貝層、混土貝層）が見られ、貝層中または上・下の層に多量の後期縄文式土器や獣骨等が出土した。

この調査区以外については工事の進行に伴い、その都度立会い調査を行なった。その結果、貝層の分布は認められなかったものの、土器等の遺物については全般に広がりを見せており、竪穴住居址と思われる落ち込みも数か所発見された。

確認された遺構及び出土した遺物は大半が縄文時代後期・堀之内Ⅱ式～加曽利Ｂ１式に属し、石器では石錘、たたき石、磨石など、骨角器では鹿角製の釣針等が出土した。また、貝層の良好な部分２ヶ所を選び、断面の保存・活用のために表面の化学的なはぎとり処理を行なった。

調査主体者　　茅ヶ崎市教育委員会
調査担当者　　堤貝塚調査団（代表：岡本勇）
調査期間　　トレンチ調査　7 月 27 日～8 月 12 日
　　立会い調査　9 月下旬まで
所在地　　茅ヶ崎市堤 2719 番地付近公道

以上のように簡単な報告が出されていたが、詳細な調査報告が出ないまま現在に至っている。
下水道工事に伴う調査では調査期間も短く記録の面でも残されにくい状況がある。しかも調査から時間も相当経過していることから現場に携わった方からの情報入手はできなかったが、遺物などが収蔵庫に保管されていたので整理することになった。

文化資料館の考古資料整理グループでは 1959、62 年の堤貝塚の報告が終了したので、この調査報告の資料整理に取り組んだ。

収納箱（テンバコ）は 16 箱あり、遺跡名、調査区とトレンチについてと思われる記号が荷札やラベルなどに記入されていたが、その照合が困難であったため遺物調査のまとめではこれらについて記載することができなかった。

遺物としての土器の分類は前回の報告書（文化資料館調査研究報告 16「堤貝塚」2008 年）に準じたが、若干表現の見直しを行った。また分類によっては数点しか見られないものもあり、これらについては細分化を止めて一括することにした。

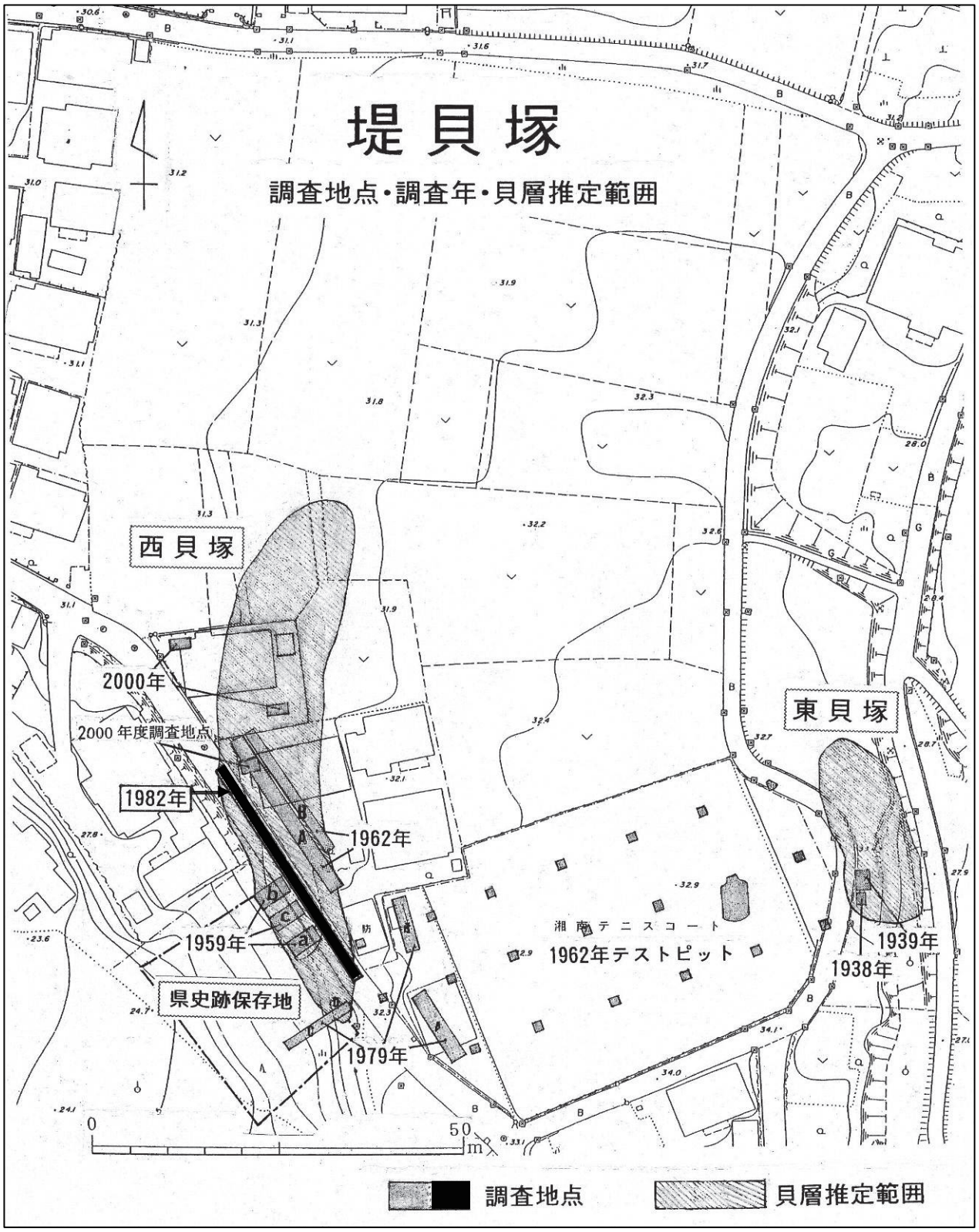
遺物として多くの土器片のほかに、復元されていた土器８点、今回復元できたもの２点がある。

市内初となる‘貝層のはぎとり’については、考古資料整理グループ員の撮影した写真が残されていたので、‘貝層のはぎとり’ができるまでの作業を記録として残すことにした。また写真を手掛かりに調査範囲図の中に凡その位置を示した。

現在、文化資料館で堤貝塚の‘貝層のはぎとり’を展示しており、貝層について直接目で確認できる。

なお貝層を構成する貝類や骨類などについては既に前回の報告書や茅ヶ崎市文化財資料集第八集などで報告されている。

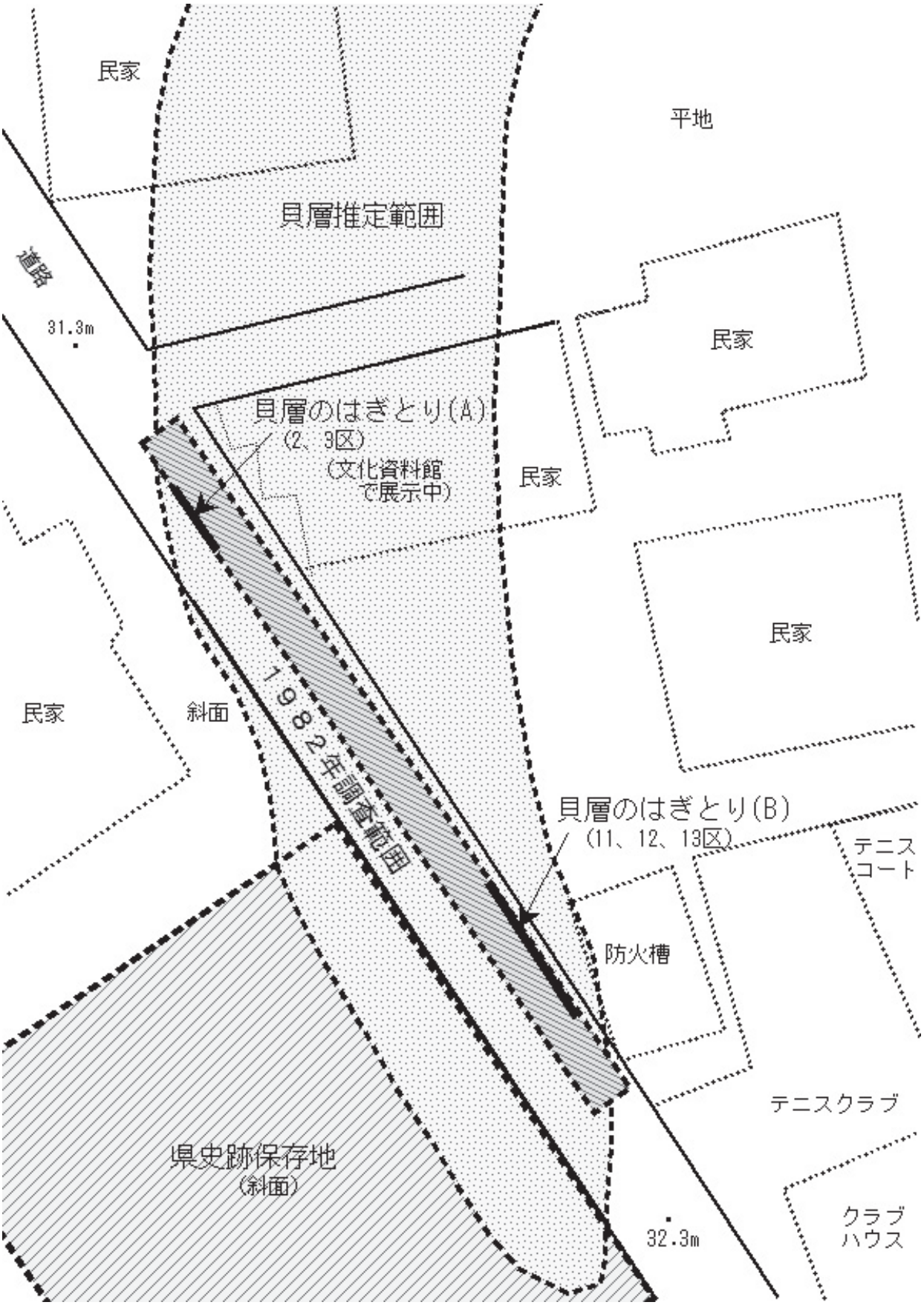
資料整理にあたっては、社会教育課の富永富士雄氏の指導のもと、考古資料整理グループが行った。



（第 12 回茅ヶ崎市遺跡調査発表会発表要旨より転載＜一部加筆＞）

■：今回の報告書の調査範囲（1982 年調査地点）

第２図　堤貝塚　調査地点・調査年・貝層推定範囲



（第 12 回茅ヶ崎市遺跡調査発表会発表要旨の図に現場写真から貝層剥ぎ取り位置を推定、調査範囲 34m、1～15 区）

第３図　調査範囲の拡大概略図（貝層のはぎとり位置）

第２章　土器

土器の分類基準

土器の分類基準は時代別とした。ただし、縄文時代後期は第４～６群として細かく分類した。

第１群　縄文草創期・早期の土器を一括する

第２群　縄文前期の土器を一括する

第３群　縄文中期の土器を一括する

第４群　縄文後期の称名寺式土器を一括する
（但し第７群に属するものを除く）

第５群　縄文後期の堀之内式土器を一括する
１類～３類を堀之内１式土器、
４類～８類を堀之内２式土器とする
（但し第７群に属するものを除く）

１類　口唇部、又は口縁上部に装飾的な文様帯を設けるもの

２類　縄文を伴わず、沈線などが施されるもの
A種　口縁上部に沈線が横位に巡るもの
B種　口縁上部を欠くもの

３類　縄文を伴い、沈線などが施されるもの
A種　口縁上部に沈線が横位に巡るもの
B種　口縁上部を欠くもの

４類　縄文を伴わず、沈線等によって文様が構成されるもの

５類　縄文を伴い、沈線等によって文様が構成されるもの

６類　隆帯、または８字状貼付文を施し、縄文のないもの

７類　隆帯、または８字状貼付文を施し、縄文のあるもの

８類　口縁部の内面、または口唇部に文様帯をもつものを一括する

第６群　縄文後期の加曽利B式土器を一括する
（但し第７群に属するものを除く）

第７群　縄文時代の土器で次の各類に該当するもの

１類　型式が特定できないもの
A種　無文のもの
B種　縄文のみのもの
C種　縄文以外の文様をもつもの

２類　注口土器を一括する

３類　把手、突起だけのものを一括する

４類　土器底部を一括する

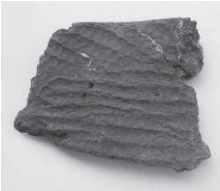
第８群　上記各群に属さないものを一括する

第１節　縄文前期の土器（第２群）

第２群の土器を第４図に示す。

1　縄文を用い施文方向を帯状に横位と斜位に展開した口縁上部である。細かい縄文が丁寧に施され、黒く硬く焼きしまっている。

胎土には僅かながら植物繊維の混入による炭化跡が見られる。



①

2　細かく丁寧な縄文を口縁部まで施している。口唇部に向かって僅かに外反する器形と思われる。

3　尖った三角形の突起を有する波状口縁部である。

口縁部が僅かに内傾すると思われる器形で、波頂部から縄文を施している。

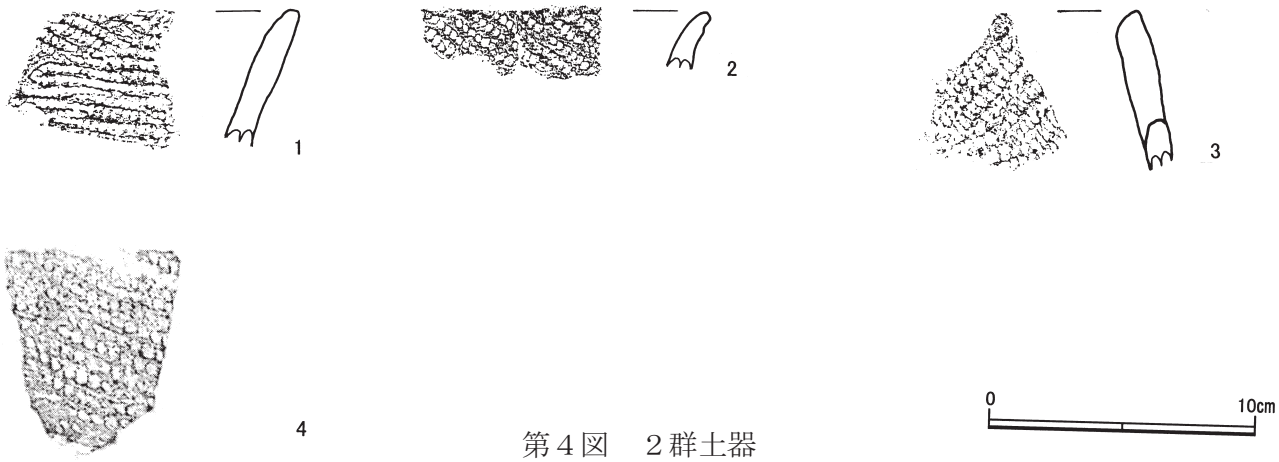
③

4　節が大きく粗い縄文を施している。

土器表面に繊維の混入も認められ、黒浜式と思われる。

④

1～3は前期前葉の土器片と思われる。



第４図　２群土器

第２節　縄文中期の土器（第３群）

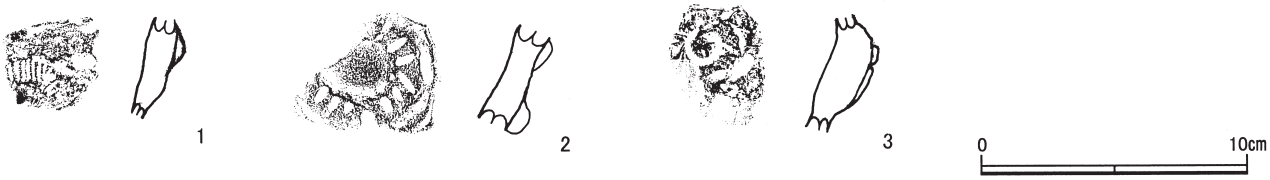
第３群の土器を第５図に示す。

1　口唇部が欠けた口縁部文様帯の隆帯の高まりに沿って下に凹みを作り、ヘラ状工具などを用いて連続的に押し付けてキャタピラ文を施している。

2　楕円形の隆帯（外径45㎜）に棒状のものでほぼ等間隔に短沈線を施した太陽文を持つ胴部である。

3　外径 30㎜ の円形の隆帯にヘラ状のもので刻みを不規則に入れている。その渦巻き状隆帯の中心部に円形状の突起を付け、そこに刻みが入っている。

1～3は勝坂式と思われるが、これらの３点は小片のため全容は不明である。



第５図　３群土器

①

②

③

（第３～６節までは縄文時代後期の土器を扱う）

第３節　称名寺式土器（第４群）

第４群の土器を第６図に示す。

但し、第７群に属するものを除く。

1　波状の細い沈線および刺突を無造作に施している。

2　沈線でＳ字形の文様を描き、その中に縄文を充填している。**1**、**2**は称名寺式前半と思われる。

①

②

3　縦位２本の沈線間に棒状工具による刺突（長さ約10㎜）を施している。

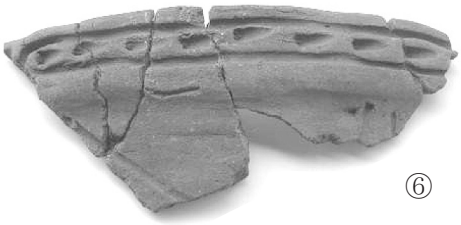
4　隆帯が弧を描き、隆帯の両脇に刺突を施している。その脇にも沈線が垂下している。

5　斜位の隆帯に棒状工具による刺突（長さ約10㎜）を鎖状に施した、やや厚みのある土器片である。

③

⑤

6　口縁上部に枠状の沈線が巡り、その中に半裁竹管による刺突(長さ約12㎜)を右から左に押し、後ろに引き抜いている。胴部に縦位と斜位の沈線が見える。堀之内１式への過渡期のものと思われる。


⑥

7　口縁上部に幅広く隆帯を貼付け、その上に平行する２本の沈線を巡らせ、その中に刺突（長さ約8㎜）を施している。口縁上部が僅かに内傾している。

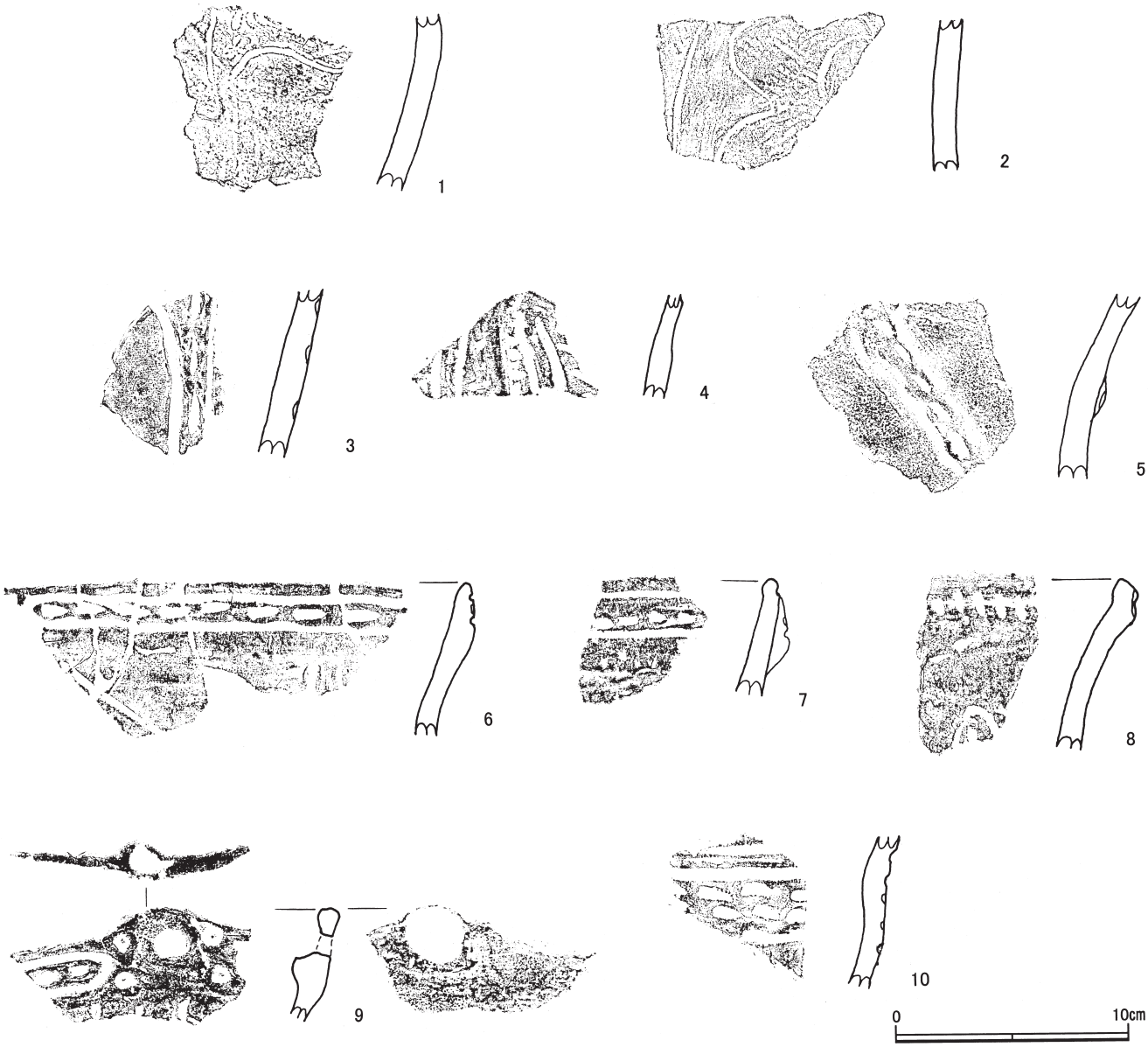
8　口縁上部に隆帯が巡り、その上に棒状工具による刺突（長さ約10㎜）を等間隔に施している。胴部にも沈線と刺突による文様がある。

9　口縁上部には枠状に沈線が巡り、その中に半裁竹管による刺突を施している。突起部には中央に貫通孔があり、その両脇には竹管による刺突を２個ずつ施している。口唇部に凹みが見られる。

10　３本の平行沈線(幅約７㎜)を施し、下２本の間に半裁竹管による２列の刺突（長さ約10㎜）を右から左に押し引きしている。

⑨

⑩



第６図　４群土器

第４節　堀之内１式（第５群１～３類）

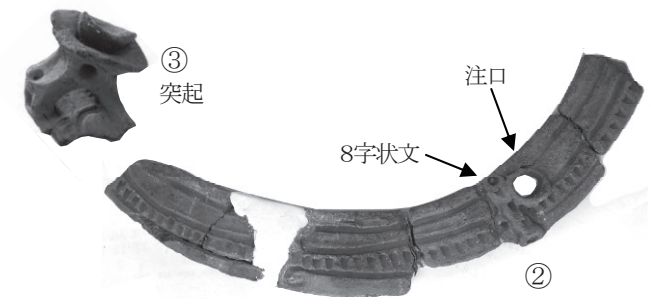
第５群１～３類の土器を第７～12 図に示す。

５群－１類　口唇部、又は口縁上部に装飾的な文様帯を設けるもの　（第７、８図）

１～５は浅鉢形土器と推定されるが、幾つかの共通する特徴がある。口縁上部がやや鋭角で内側に屈曲し、その幅広の口縁部に文様帯を設ける。その文様帯には横位に巡らせた沈線間または枠内に刺突列を施し、縄文はない。胴部は無文である。堀之内１式初期のものと考えられるが、称名寺式終末期と重なる段階あるいは過渡期のものとも考えられる。

１　屈曲部から口唇部にかけて取り付けた長い８字状貼付文が、僅かに先端を先へ突き出し小突起状になる。貼付文の両側に描いた枠内には刺突列を施し、胴部は無文で、図上復元での口径は約 30 ㎝である。

２、３　接合できないが同一個体と考えられる。**２**の文様帯にある枠内は無文で、枠の下に巡らせた沈線との間に刺突列を施している。また文様帯の一部に筒部が非常に短い注口を取り付けているのが特徴的である。注口の左には長い８字状貼付文を付け、胴部は無文で、図上復元による口径は約 29 ㎝になる。さらに**２**の文様帯と同様の文様を一部にもつ突起**３**が**２**の文様帯の延長にあったと推定できる。**３**は縦位に橋状把手を取り付け、頂部は杯状で中は渦を巻き、突起の内外面に深い刺突を数か所に施している。**２・３**は突起の付いた注口付浅鉢形土器と思われる。



４、５　この節の冒頭に示した共通する特徴の他に、**４**は刺突列を中に施した２つの隣りあう枠状文の間に、大きめの深い刺突を上下に施している。胴部の器面調整はやや雑である。**５**は文様帯の２条の沈線間に竹管による刺突列を丁寧に施した土器片である。

６　外面は無文で、内面に沈線を施した小突起を取り付けている。口縁でやや外反し、器面調整は丁寧である。堀之内２式の可能性も否定できない。

７　内面上部にある文様帯には、直径約２㎝の半球状にえぐられた凹部と短沈線が見られ、欠損した貫通孔がある。外面には横位と斜位の数条の沈線を平行に施し、斜位の沈線間に細い隆帯を１本貼りつけ、半裁竹管の内側を利用して丸く整えていると思われる。外面と口唇部には楕円形の凹部が見られる。

８　口縁上部が内傾した部分に縦に短い隆帯を貼りつけ、横に刺突を伴う。その左右には口唇に沿って枠を描いている。胴部外面は無文である。

９、10　突起をもつ土器片で、隆帯・刺突・沈線などが複雑に入り組み、突起下には貫通孔を持つ。**９**の胴部外面に縦ナデ、内面に横ナデの痕が見られる。

11　口縁上部に刻みをもつ隆帯を横位に貼り付け、小突起の下に８字状貼付文を取り付けている。内外面に沈線や刺突を施している。

12　口縁上部がやや内傾した部分に沈線が巡り、その直下に刻みをもつ隆帯を貼り付けている。胴部は無文である。

13、14　口縁上部がやや内傾し、突起下に貫通孔がある。外面は貫通孔の両側に数条の縦位短沈線や円弧を描き、その横に１～３条の沈線を横位に施している。内面には大小の刺突や沈線を施している。**13** の胴部外面には２本の低い隆帯が垂下し、器面には縦のヘラ磨きの痕が見られる。**14** の突起頂部には凹部がある。

15　突起部外面のやや大きい刺突の周りに、円と円弧を施した口縁部破片である。

16　緩く立ち上がる突起に貫通孔を設け、刺突や沈線を施している。

５群－２類―A種　縄文を伴わず、口縁上部に沈線が横位に巡るもの　（第９図）

１　頸部でくびれ、胴部でふくらむ鉢形土器である。復元した土器の口径は 34 ㎝で、底部は欠損しているが残存する高さは最大で 29 ㎝である。口縁部の３か所に低い突起を取り付け、その一か所には貫通孔がある。その左右に短沈線を施し、さらに外側に付けた刺突から口唇に沿って沈線が巡っている。

頸部無文帯を設け、突起下方のくびれ部には１か所の刺突の周りに曲線的な沈線を施し、その外側に３条の沈線がくびれ部を巡っている。胴部下方へ垂下した３条の沈線は次第に細くなり消失する。くびれ部から下へ斜行する２条一組の平行沈線が胴部の数か所に見られるが、文様が不鮮明、残存部が不十分で全体の文様構成は明らかではない。（口絵写真参照）

2　口縁上部を横位に巡る沈線上に円形刺突を３個並べ、胴部には４条の沈線を斜位に施している。

3、**4**　小突起を持ち、口縁に沿って沈線を巡らす以外は無文である。**3**は緩やかなくびれ部を持ち、沈線の描き方は雑である。**4**には貫通孔がある。

5　突起に貫通孔を持つ口縁部破片で、頸部に把手の一部が残存している他は無文である。把手は本体頸部のくびれ部をまたぐ橋状把手と考えられる。

②

⑥

6　突起部に貫通孔をもち横に刺突がある、貫通孔の下に鎖状刻みのある隆帯が垂下し、胴部には方向を変えた数条の平行な沈線が交差している。口唇部には楕円形の凹部が見られる。

7、**8**　口縁上部に１条の沈線が巡り、その下に垂下する沈線や、曲線的な沈線を施している。

５群－２類－B種　縄文を伴わず、口縁上部を欠くもの　（第10図）

1　横位の刺突列を施した直下に、沈線が巡り、その下に２～３条を組にした沈線がやや斜位に垂下している。頸部が僅かにくびれている。

2～6　頸部のくびれ部に横位の沈線を施している。胴部は曲線的な沈線を施しているものが多い。**4～6**はくびれ部より上は無文のようである。他は欠損していて不明である。くびれ部に、**2**は円形貼付文、**3**は広い凹部、**4**は８字状貼付文がある。

7　縦位に２条の隆帯と曲線的な沈線が垂下し、器面調整は丁寧である。

8　横長の菱形を組み合わせた文様を持っている。

9～11　胴部で膨らむ土器片で、器面全体に緩やかな曲線的な沈線や直線を施し、**9**には渦巻き状の沈線も見られる。特に **10** の器面調整は丁寧で、全体に隙間なく沈線を施し、石井寛氏が指摘する集合沈線充填手法による器面の均質化が見られ、堀之内１式の最終段階のものと考えられる。

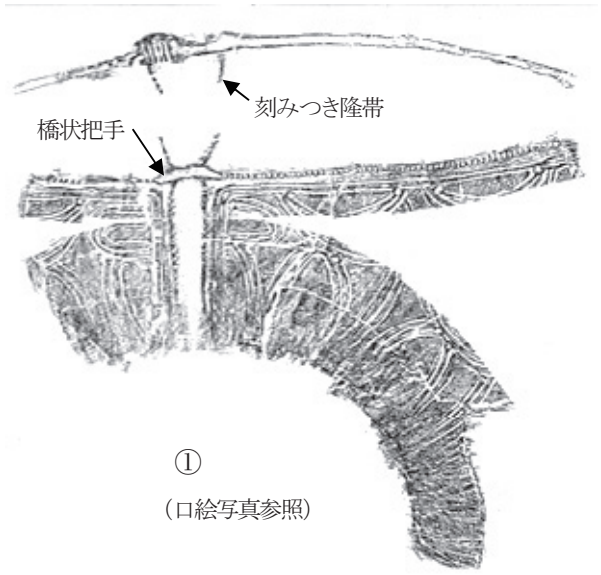
12　直線的で平行な沈線が垂下し、下部では沈線が次第に細くなっている。相模系沈線文土器と推定される。土器は厚みがあり、上部と下部ではその差がやや大きい。施文はやや雑である。大形の土器と考えられる。

13　半裁竹管の内面を器面に当てて引いた２条の平行沈線を、縦位・斜位に全面に施している。

14　曲線的、直線的で、細く弱々しい沈線が一見無造作に描かれていて、文様構成を読みとることは難しい。先端が尖った施文具で描いたと思われる。

５群－３類－A種　縄文を伴い、口縁上部に沈線が横位に巡るもの　（第11図）

1　頸部でくびれ、胴部でふくらむ鉢形土器で、底部は欠損しているが、口径約38㎝に復元されている。口縁上部に沈線が横位に巡り、突起には縦に短沈線が数本あり、その横に貫通孔がある。外側のくびれ部を巡る隆帯を橋状に繋ぐように把手が付いている。くびれ部から上は突起から斜めに下りる刻みつき隆帯の他は無文である。文様帯はくびれ部から下にあり、円弧文と３条の並行した沈線で文様を構成し、余白には細



①
（口絵写真参照）

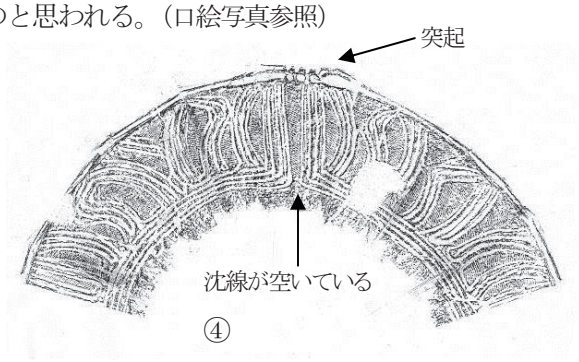
縄文を丁寧に施している。文様の繰り返しから２か所に突起をもつと考えられる。胴部下方へ垂下した３条の沈線は次第に細くなり消失し、下部に区画線がない。堀之内２式へ移行する時期のものと考えられる。

2　頸部に無文帯をもち、強く屈曲したくびれ部には２条の沈線が巡り、胴部で膨らむ土器である。胴部に描いた沈線の余白には縄文を充填している。

②

3　口唇部に沿って巡る沈線の直下にある凸部に縄文を施している。頸部は無文で、くびれ部に２条の沈線が巡り、沈線間の盛り上がり部にも縄文を施している。

4　朝顔形の深鉢で、底部は欠損しているが、口径約 22 ㎝に復元されている。口縁に沿って沈線が巡っていて、１か所ある突起部には大波と小波３山とそれに対応した貫通孔をもち、そこから４条の沈線が少し離れて２組垂下し、口縁下約 10 ㎝の胴部中央付近で直角に左右に分かれて曲がり、胴部を巡っている。垂下する沈線の脇に円弧文があり、多条沈線の間や円弧文の中には縄文を丁寧に施している。胴部下部の区画線は一部空いている。堀之内２式へ移行する時期のものと思われる。（口絵写真参照）



④

5、**6**　口縁上部に沈線が巡り、胴部には直線的な沈線を描いている。**5**は余白に縄文を充填し、口縁部に８字状貼付文を取り付けている。**6**には地縄文が見られる。

7　口縁上部に沈線が巡る土器で、地縄文に直線的な沈線を縦位・斜位に施している。図上復元で口径は約 10 ㎝の小形土器である。

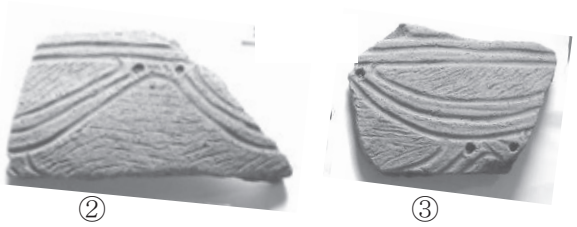
8　頂部が欠損している突起をもつ土器片で、口唇に沿って沈線が巡っている。地縄文に直線的・曲線的な沈線を施している。称名寺式土器の可能性も否定できない。

５群－３類－B種　縄文を伴い、口縁上部を欠くもの（第 12 図）

1　やや斜位に隆帯を貼りつけ、直線的・曲線的な沈線で文様を描き、余白に縄文を充填している。

2、**3**　この２片の胴部破片は接合ができないが同一個体と思われる。上部に３条の平行沈線を横位に施し、その下に３条一組の円弧を一単位として横に連ねている。その下にも同様の円弧文をずらして施文し、２段構成の連弧文になると思われる。

いずれの円弧文も中央沈線の先端を竹管による刺突で留めている。余白には縄文を隙間なく充填しているが、硬くなった表面に縄文原体を強く押圧しながら回転させたような部分が見られる。全体的には規則的に描かれた沈線、刺突、隙間なく充填された縄文などから非常に丁寧な作りであることがわかる。


②　③

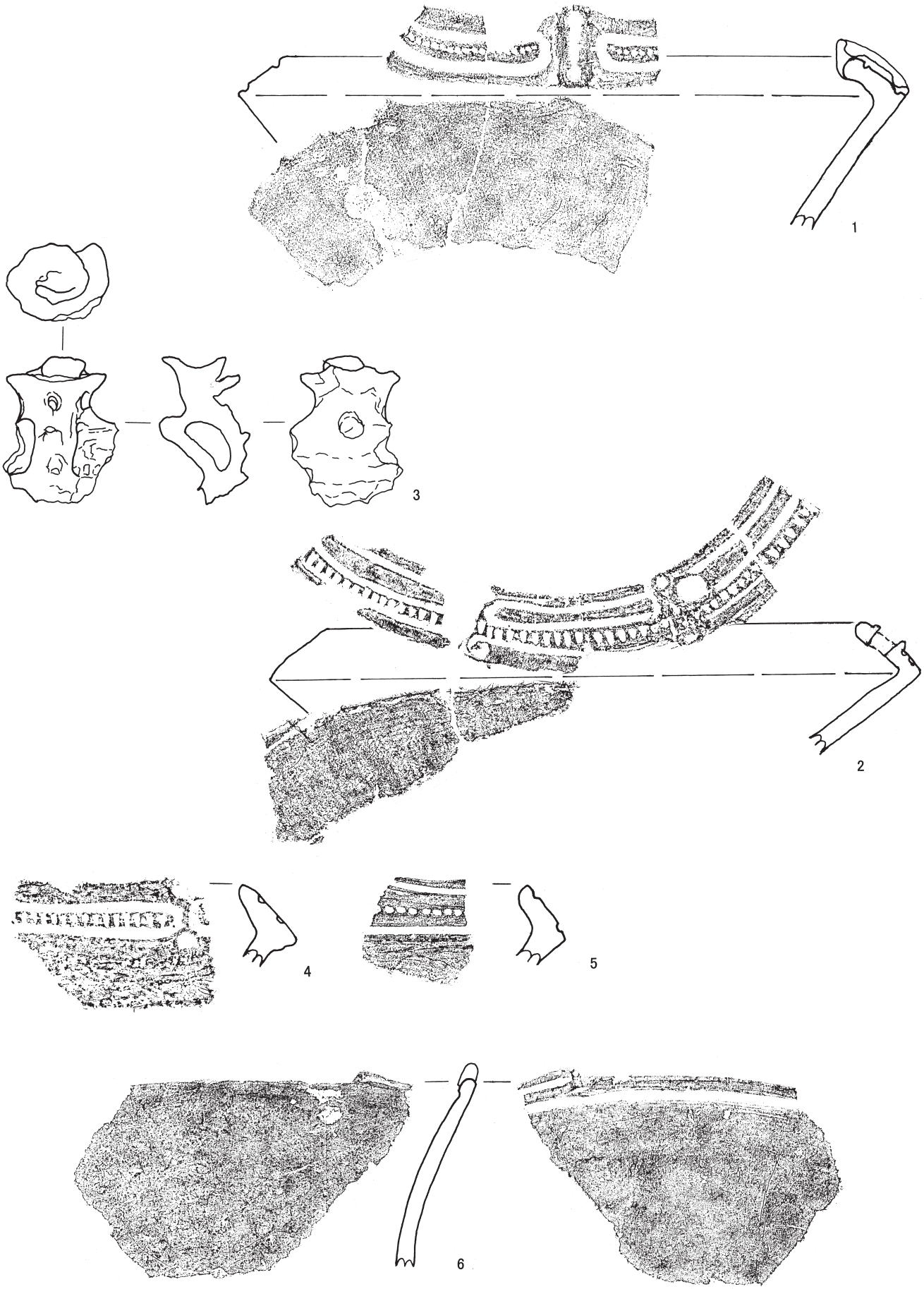
土器片上部の直径は約 28 ㎝で、色調はかなり明るい黄褐色である。縄文の施文の様子や連弧文などの文様構成、色調などから、今まで堤貝塚で出土した土器と比べると、やや異質な土器と思われる。

4　横位に施された沈線の下に三角形や円弧を描き、余白に縄文を充填している。

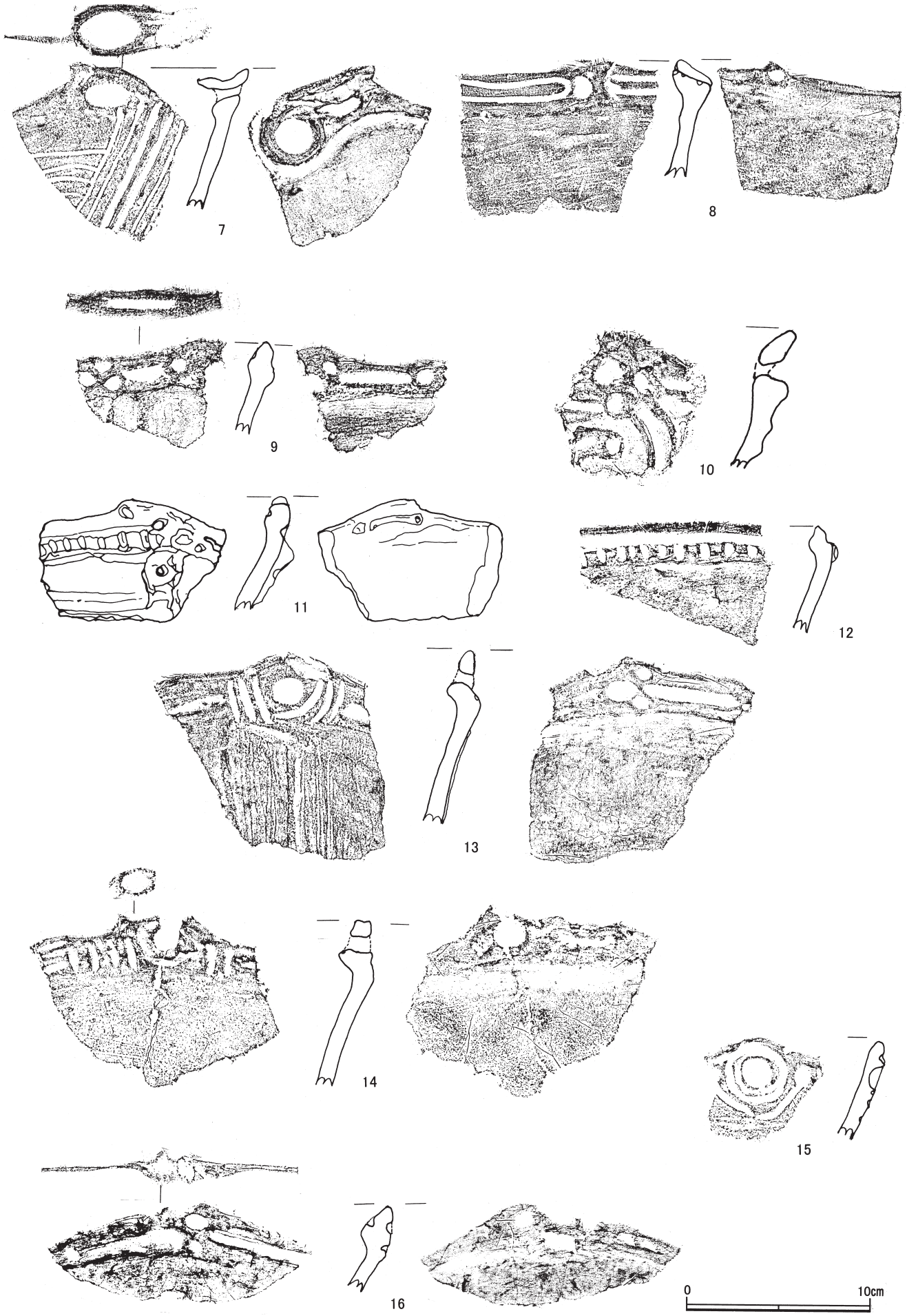
5～**8**　頸部にくびれ部がある。くびれ部に**5**～**7**は沈線を横位に施し、**8**は刻みのある低い隆帯を貼り付けている。**6**は８字状貼付文を付け、**7**は円形貼付文と垂下する鎖状の刻みのある隆帯を貼り付けている。いずれも胴部には数条の円弧または直線で文様を描き、余白には縄文を隙間なく充填している。**5**、**7**、**8**は頸部に無文帯を持ち、**6**も同様と思われる。

9～**14**　直線または曲線的な沈線と縄文で文様が構成された胴部破片である。**9**と **11** は縄文を地文とし、**10**、**12**～**14** は余白に縄文を充填している。沈線は主に縦方向に描かれているものが多いが、**12**、**13** には曲線や流線状のものが見られる。

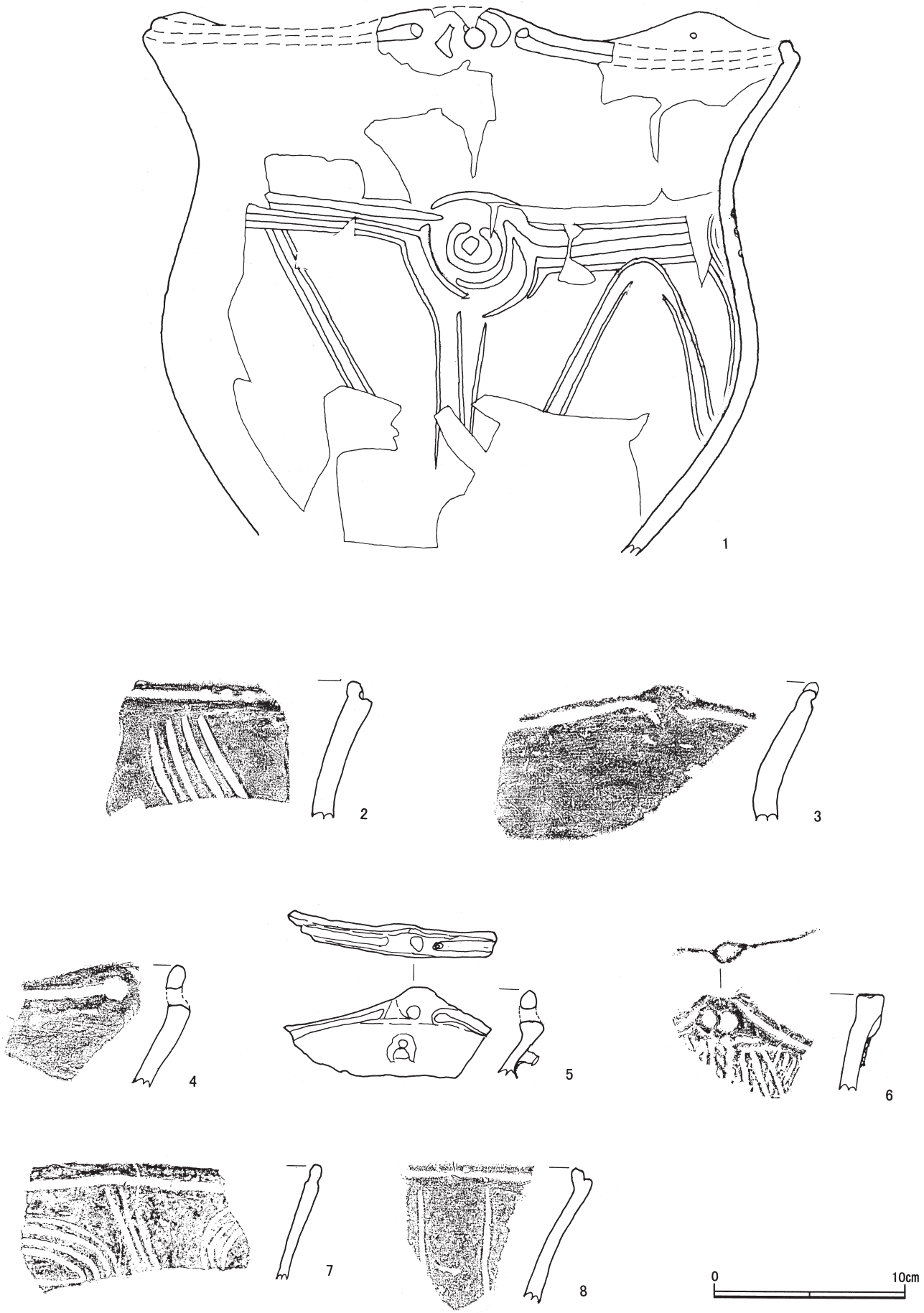
以上**1**～**14** の胴部は、沈線の他に、ほぼ全面に隙間なく縄文を施しているのが目立つ。



第７図　５群土器　１類（１）



第８図　５群土器　１類（２）



第９図　５群土器　２類 Ａ種

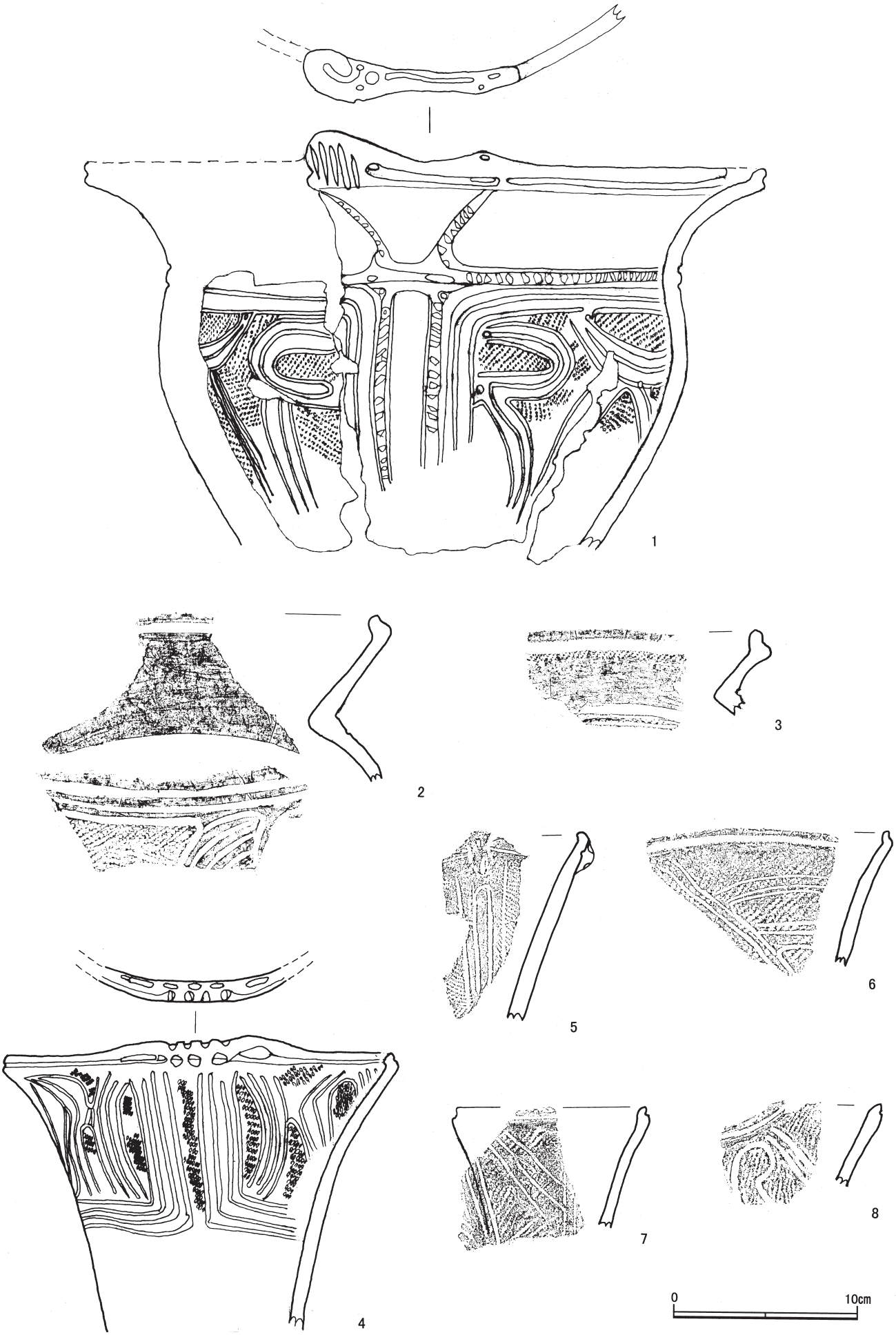
第10図　５群土器　２類 Ｂ種

5−2−B ①

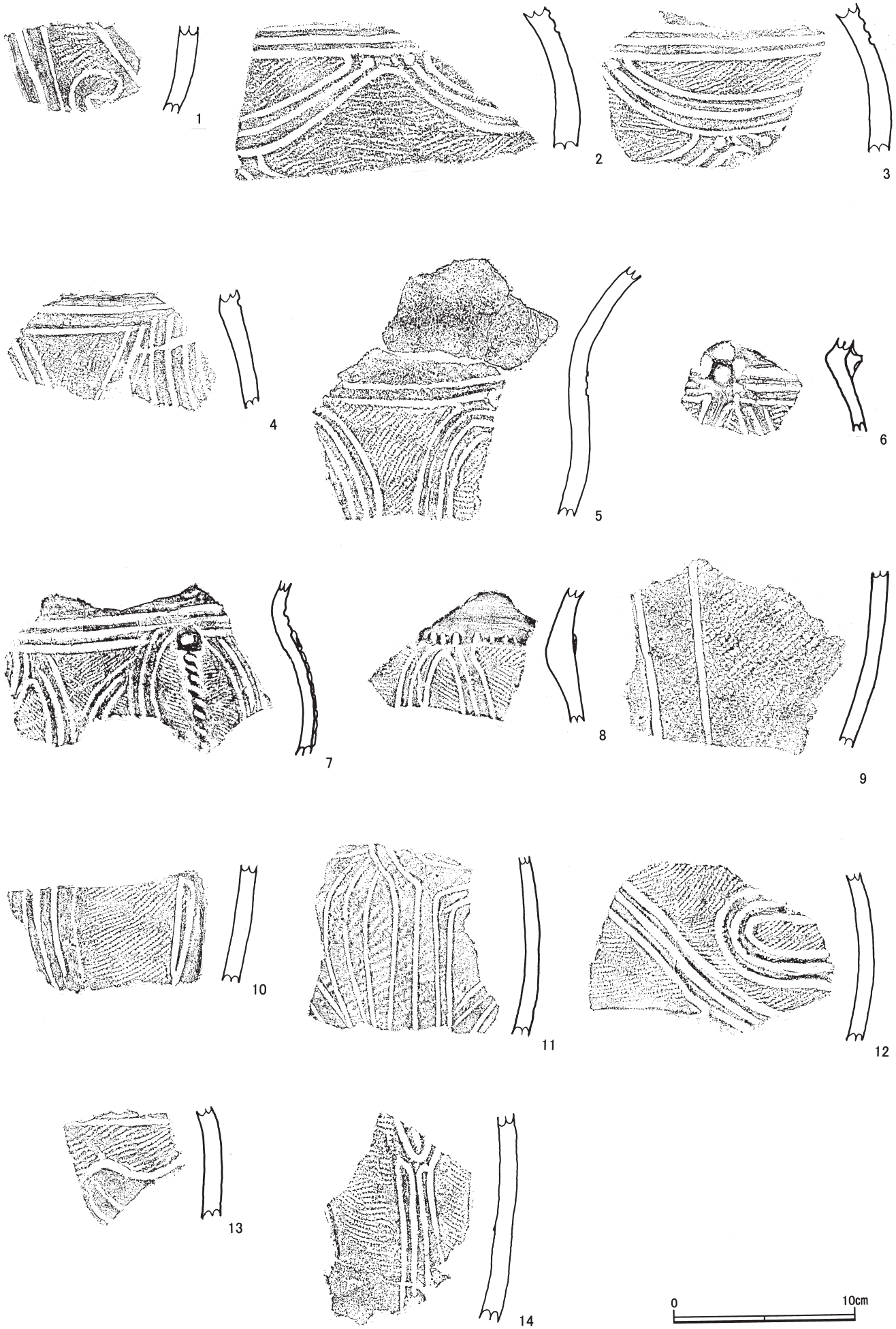
②

⑧

⑩



第11図　５群土器　３類 Ａ種



第12図　５群土器　３類 Ｂ種

第５節　堀之内２式（第５群４～８類）

第５群４～８類の土器を第13～18図に示す。

５群－４類　縄文を伴わず、沈線等によって文様が構成されるもの（第13図）

１　頸部から口縁部に向かって広がる形の鉢形土器で、器高14.5㎝、口径28.5㎝、底径９㎝で復元されている。（口絵写真参照）

中央部の頸部から下の内面は半球形に整えられ、そこに稜をおいて上部へと広がっている。2004年に報告した浅鉢形土器（土器番号75、口絵カラー写真）に類似している。

口縁部には大小２個で構成される突起が３か所存在していると思われる。突起部には３個の刺突を施し、小さい突起は刺突のみだが、大きい突起には中央の刺突をかこんで２条の沈線で円や弧線を描いている。突起の中央部右側には指で押した傾斜が認められる。

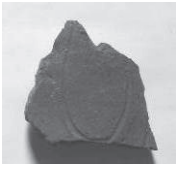
頸部に２条の沈線が巡り、その間に破線状の沈線を施している。上部は突起部を中心に３条の沈線を三角状に頸部まで施し、突起間には４条の沈線が垂下している。横位の沈線の下部には４か所に垂下する２条の沈線があり、左右に３、４条の弧線を描いているが、線は細い。

底部には、１越え２潜り１送りの編み物痕がある。

２　頸部から口縁部に向かって広がり下部が膨らむ鉢形土器の口縁部で、上部に無文帯をもつ１と同様の土器と思われる。口唇部には沈線が巡るが粗雑であり、堀之内１式からの移行期のものと思われる。下部には沈線が巡り、下に文様が広がるものと思われる。

３、**４**　相模系沈線文土器で、**３**にはU字と縦位の沈線が認められる。**４**は縦位の沈線のみだが、縦位、横位のヘラ撫で痕が顕著に認められる。

５　円形の貼付文をおき中央を押捺している。その周りを沈線で囲み、下部には円弧状の沈線を施している。胎土は緻密である。



③

⑤

５群－５類　縄文を伴い、沈線等によって文様が構成されるもの（第14図）

１　鉢形土器だが、口縁部を含む胴半分までのほとんどが失われている。上部は無文で、５群４類の１と同様な形になると思われる。内部も同様に下半分を球形に整え、少しの厚みをもって外反して口縁部に至る。（口絵写真参照）

頸部には横位の沈線が巡り、その下に２条の沈線でU字形を７個描き、それを繋ぐ形で上部と下部に２条の沈線があり、細かい縄文を充填している。

底部には２越え２潜り１送りの網代痕がある。

２～**４**は口縁部の土器片で、口唇部を平面状に成形している。

２　器面上部に２条の沈線で帯状の文様を描き、細かい縄文を充填している。口唇内面には太い沈線が２条巡っている。

３　器面上部に横位の沈線があり、その下に三角形を描き、中に沈線を充填し、余白には細かい縄文を施している。

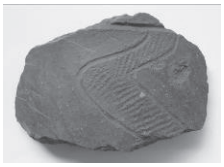
４　地縄文を施し、横位の区画沈線の下には斜線で三角文を描いている。

５～**９**は胴部破片であり、いずれも充填縄文をもつ。

５　三角文を描き細かい縄文を充填している。下部には区画沈線が巡っている。

６　上部に横位の沈線が巡り、２条の沈線でくの字形を描き、縄文を充填している。余白を丁寧に磨き、内面の磨きも丁寧である

７　無文の胴部下半から、角度をもって立ち上がる鉢形土器と思われる。胴部下半の横位の沈線の上部に、２条の沈線による三角文を多重に描き、縄文を充填している。胴部下半の磨きは丁寧である。



⑥

⑦

８　帯縄文が巡り、縄文を粗く充填している。

９　２条の沈線で縦、横の区画を描き、細かい縄文を充填している。その下に多重の沈線により渦巻文を描き、渦巻文の一部にも縄文を施している。

5群－6類　隆帯、または８字状貼付文を施し、縄文のないもの（第15図）

1　山形の突起をもつ口縁部で、山形に沿って刻みをもつ隆帯と８字状貼付文がある。これに続き刻みをもつ隆帯が見える。突起の内面は張り出しをもち、上部に円を描き、沈線を山形に沿って描いている。

2　口唇部を強く内面に押捺している。その下に円形の文があり、横位に沈線が巡り、その下に縦位の沈線を描いている。内面にも沈線が見える。

3　山形の突起をもち、頂部より長い８字状貼付文があり、８字状の下の部分を広く押し広げていると思われる。その下には横位に８字状貼付文があり、その周りに２条の沈線が巡っている。上部には３条の横位の沈線があり、下部には弧状の沈線を描いている。

4　外反する胴部の土器片で、連鎖状の刻みをもつ隆帯が２本巡り、８字状貼付文で繋いでいる。隆帯の下部には斜位に多条の沈線を描いている。

5群－7類　隆帯、または８字状貼付文を施し、縄文のあるもの（第16、17図）

1　朝顔形の深鉢（口径 31 ㎝）として復元されているが、底部は失われている。

口唇部を平面状に整形している。上部には連鎖状の刻みをもつ２条の隆帯が巡り、隆帯を繋いで８字状貼付文があり、３個の刺突を施している。その下に区画沈線が２条巡り、下部にも区画沈線を施し、その間に渦巻文を４個描いている。これを繋いで上下に横位の沈線を描いている。渦巻文を中心に縄文を施しているが、かなり不規則である。渦巻文の配置も不規則である。

口縁内面には文様が１か所見られる。口唇部及び左側が欠損しているために全容はつかめないが、丁寧に文様を描いている。中央に２条の沈線で半円を描き、その上に円があり、それを囲んで弧線を描いている。それらを囲んで半裁竹管で花びら状に文様を描いている。この内面と同じ文様が、突起部にも存在したと思われる。（口絵写真参照）

2　朝顔形深鉢として復元されているが底部は失われている。口径は24.5㎝で赤褐色である。

口縁部直下から三角文を描き、縄文を充填している。口唇部近くに背の高い８字状貼付文がある。三角文の中心部と思われるところに２条の沈線を三角文の下部まで垂下し、弧線で結んでいる。

3　深鉢と思われる。口縁近くに刻みをもつ２条の隆帯が巡っている。下部区画沈線が見えるが、その上に弧線による文様を横位に描き、縄文を不規則に施している。

4　丁寧に仕上げられている。口縁近くには連鎖状の刻みをもつ隆帯が２条巡り、８字状貼付文がこれを繋いでいる。その下に２条の沈線を描き縄文を施している。下部には弧状の沈線を描き、縄文を施している。

5　上下に沈線を描き、刻みをもつ角ばった隆帯が斜位にある。その下には３条の沈線を同様に斜位に描き、余白に縄文を施している。

6　波状口縁の一部と思われるが、口唇部が失われていて判然としない。大きめの刻みをもつ隆帯を口縁に沿って施している。口縁頂部からは斜めの刻みをもつ隆帯が垂下し、竹管で刺突している。その下には縦位と斜位の沈線があり、縄文も一部に見られる。

5群－8類　口縁部の内面、または口唇部に文様帯をもつものを一括する（第18図）

1　外面は無文だが、頂部より刻みをもつ隆帯が垂下している。内面は中央に渦巻きを描き、口縁上部に張り出している。渦巻きの右側には縦位の沈線を充填している。左側には沈線で枠を描き、中に短沈線を施している。

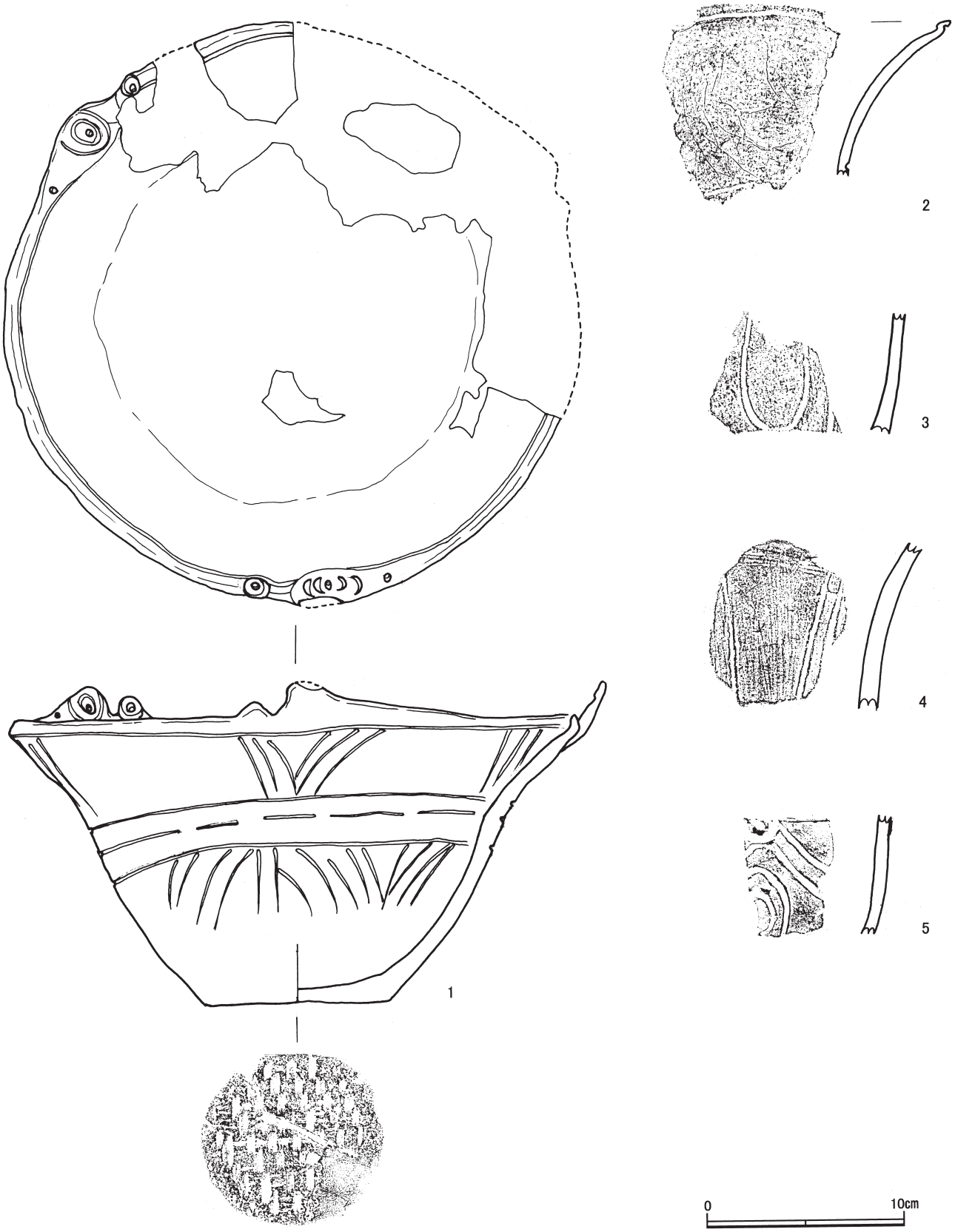
2　口縁部が山形で、外面は無文である。内面頂部には大きく円状にえぐった文があり、円を囲んで沈線を描いている。左側には短沈線が見える。

3　山形の頂部をなし、外面は無文である。内面は刺突を囲んで渦巻きを描いている。

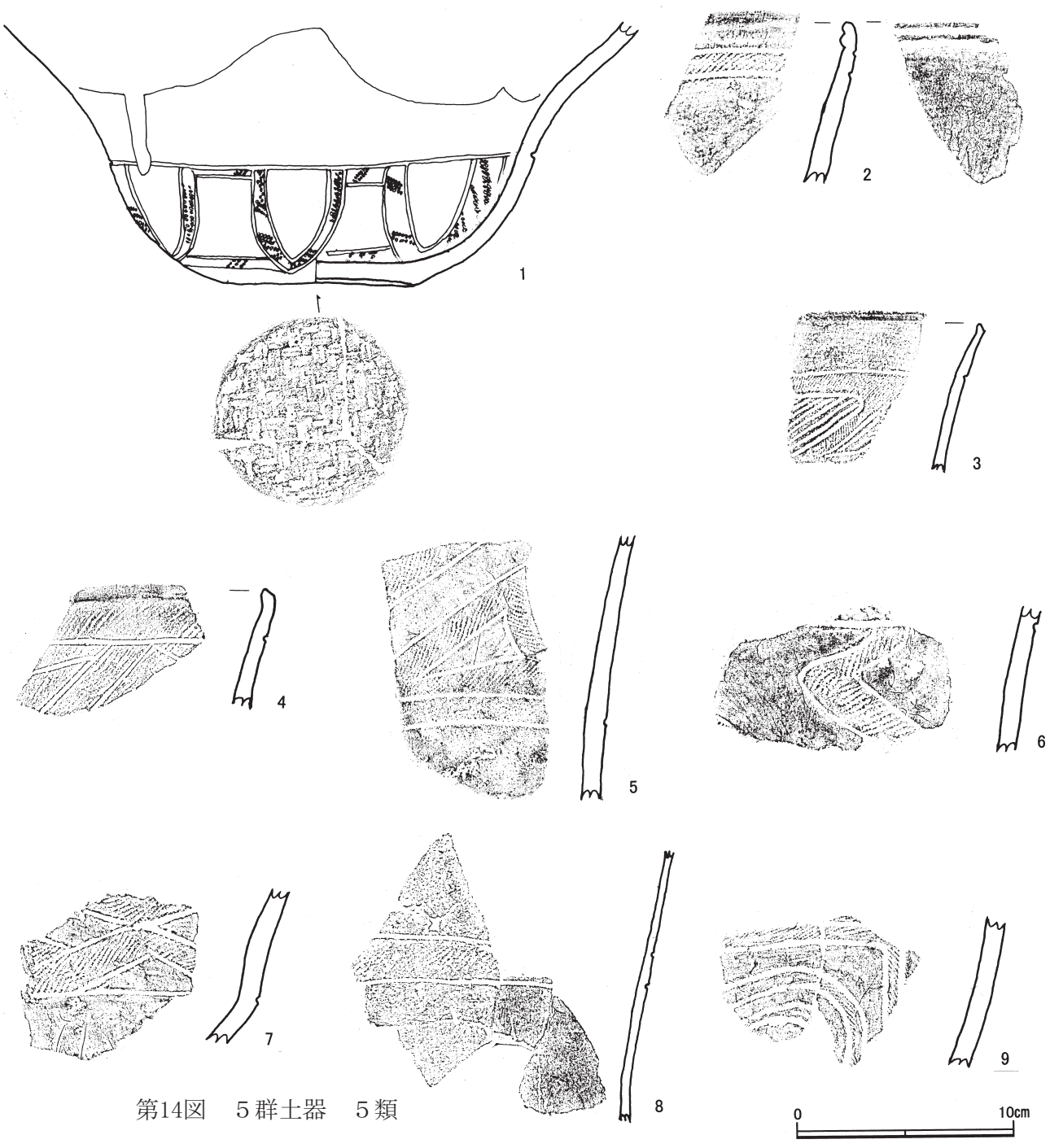
5-6 ③

5-7 ④

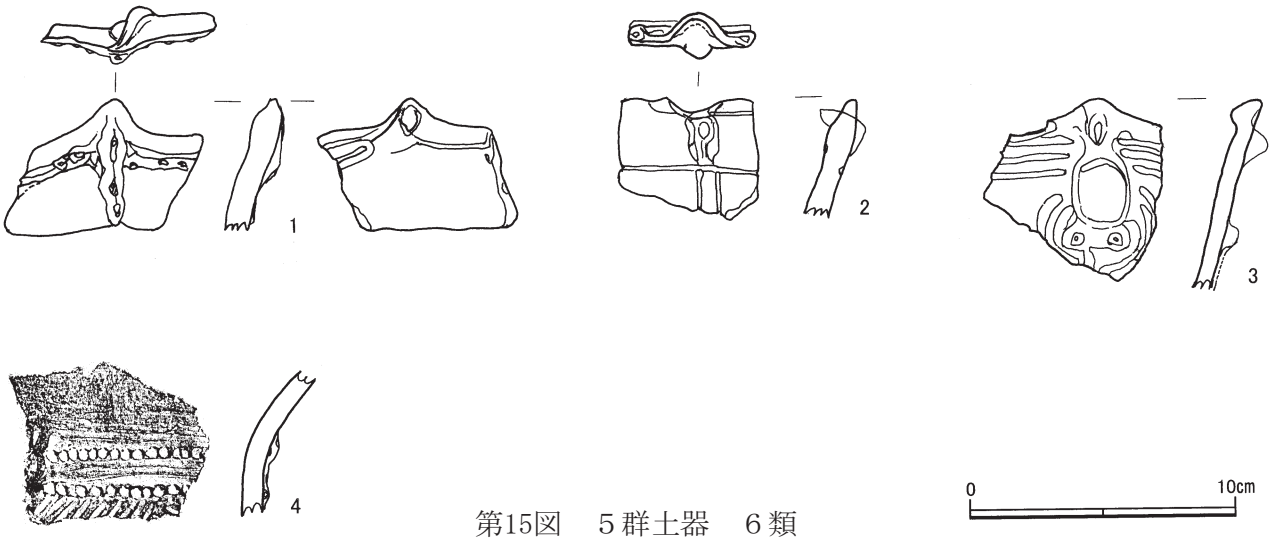
5-8 ①



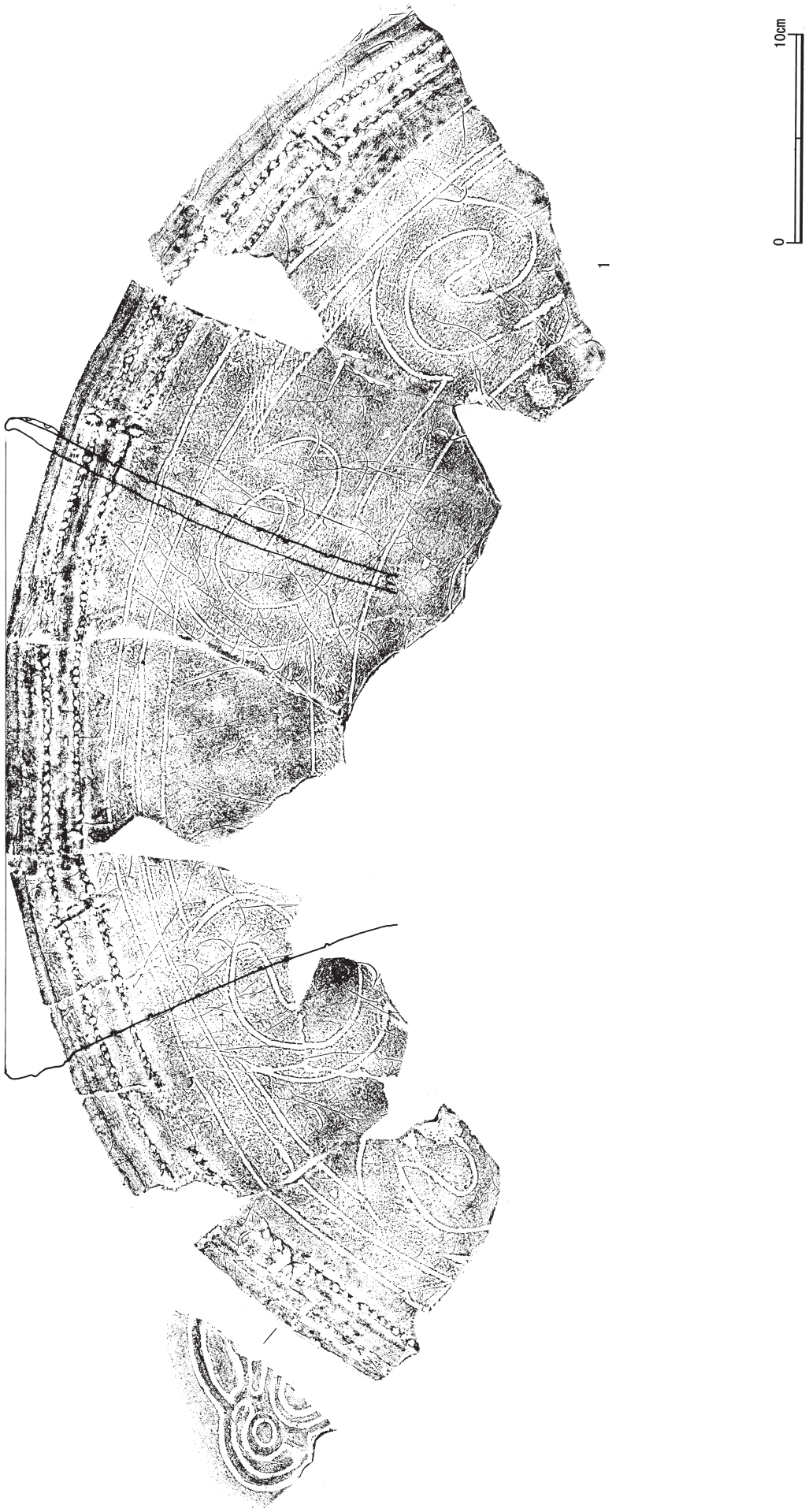
第13図　５群土器　４類



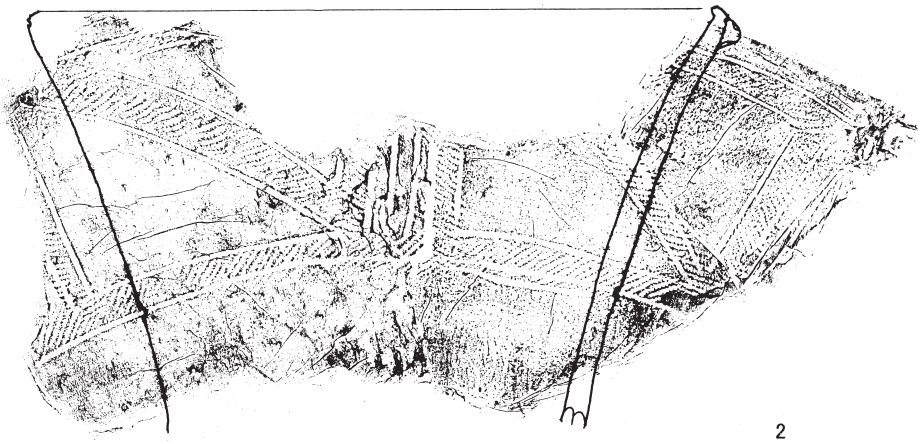
第14図　５群土器　５類

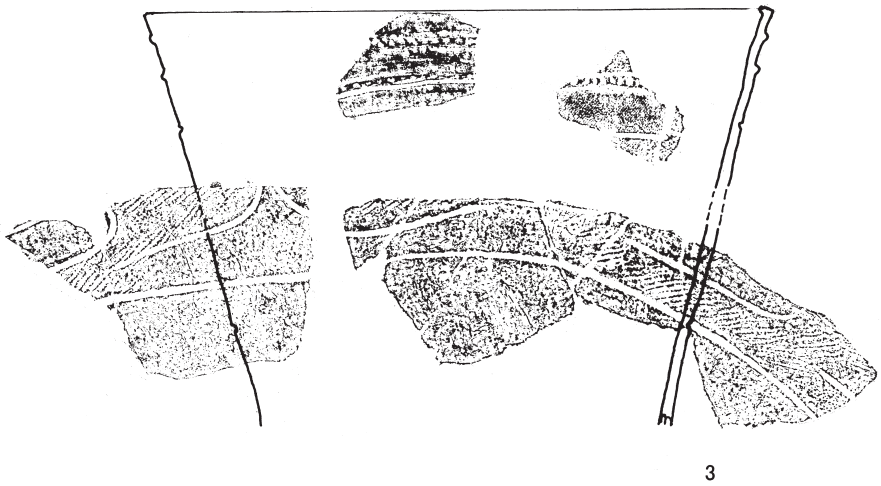


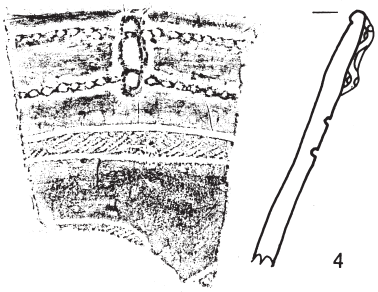
第15図　５群土器　６類

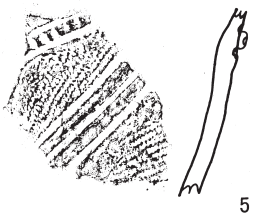


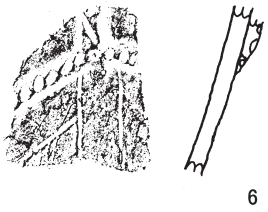
第16図　５群土器　７類（１）



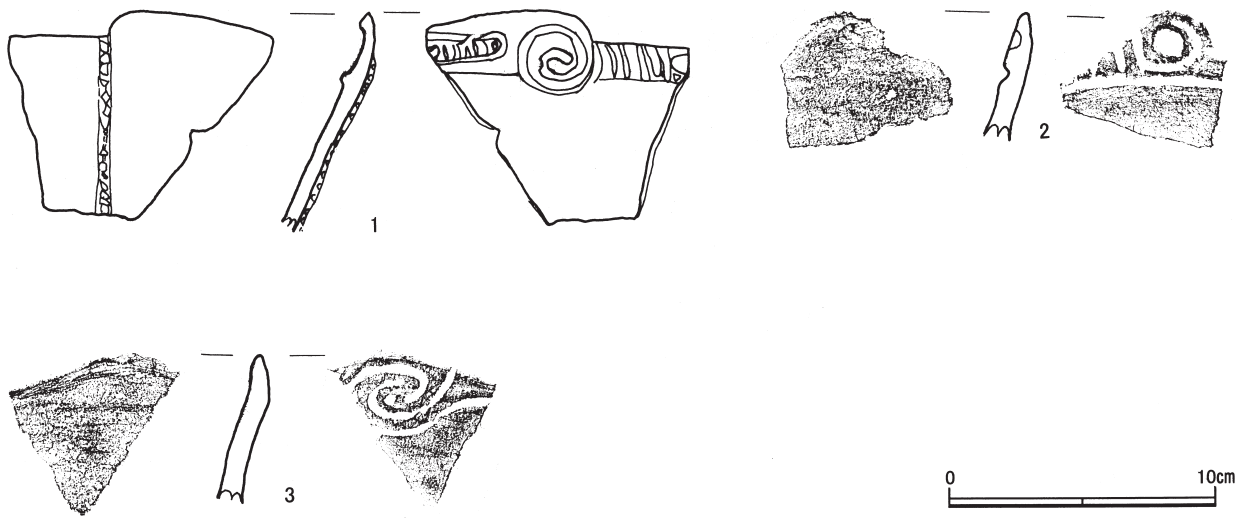




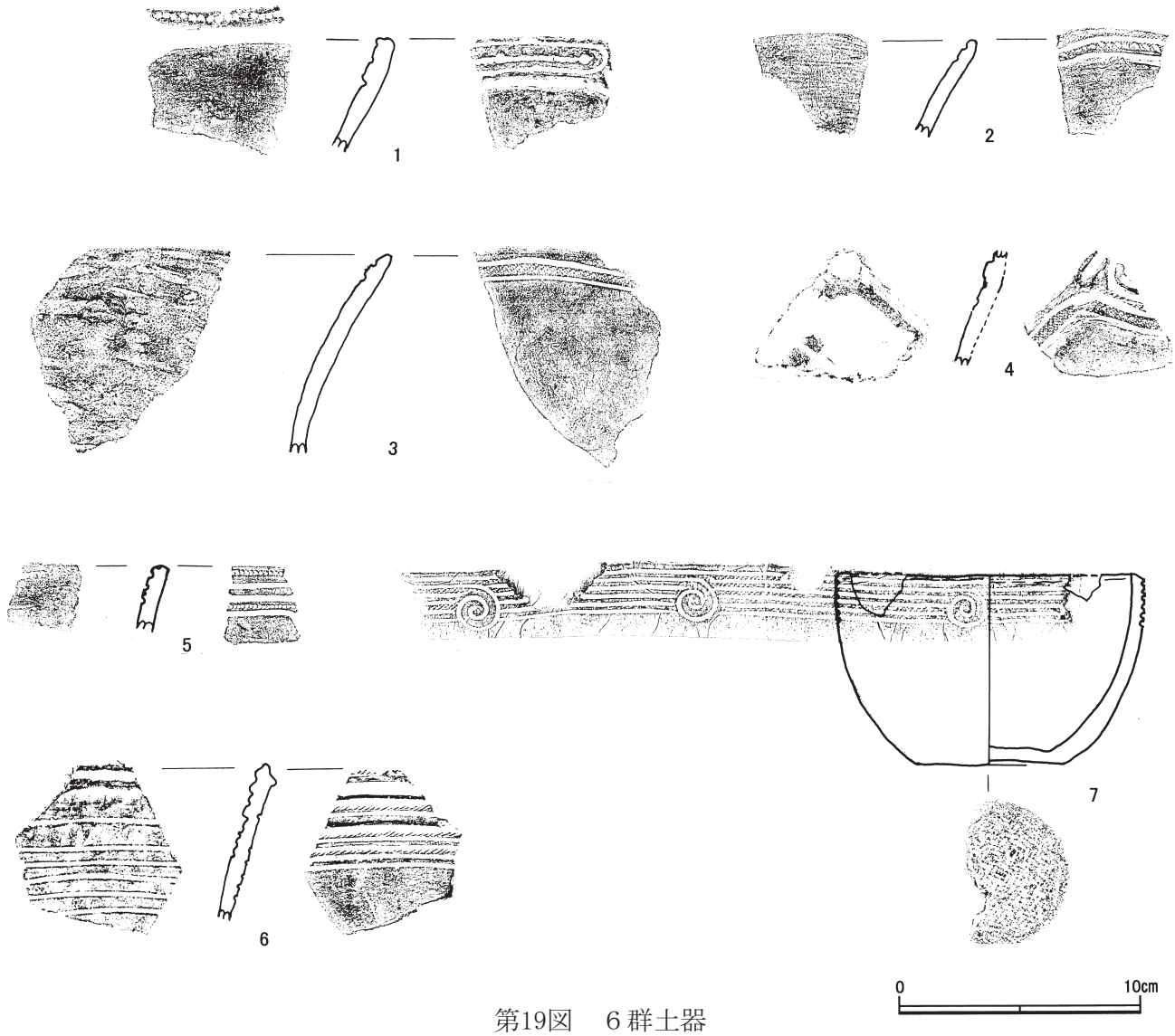




第17図　５群土器　７類（２）



第18図　５群土器　８類



第19図　６群土器

第６節　加曽利Ｂ式土器（第６群）

第６群の土器を第 19 図（前頁）に示す。

但し、第７群に属するものを除く。

1　鉢形土器のやや内湾する口縁部である。外面は無文であるが、口唇部は細い竹管による刺突列、内面は沈線と刺突で文様を構成している。

2　鉢形土器の口縁部である。外面は無文であるが、内面は上部に細縄文と２条の平行沈線を巡らせ、沈線間を刺突列で充填している。口唇部には外面から内面に少し押して歪ませたところがみられる。

①

②

3　鉢形土器の外反する口縁部である。外面は無文であるが器面調整の擦過痕が顕著である。内面は口縁上部に２条の平行沈線を巡らせ、その間を細縄文で充填している。内面の器面調整は丁寧である。

4　鉢形土器の波頂部あるいは突起部である。外面は剥離しているが、頂部には刺突がある。内面は口縁部に沿って沈線３条を描き、その間を細縄文で充填している。

③

④

1～4 は堀之内２式の可能性も考えられる。

5　鉢形土器の口縁部である。外面は無文で、口唇部には極小の刺突列がある。内面は口縁上部に沈線 3 条が等間隔に巡り、その間に極小の刺突列を施している。内面の器面調整は丁寧である。

6　鉢形土器の口縁部である。外面には上から幅４㎜の沈線１条、隆帯１条、幅２㎜の沈線６条が横位に巡っている。また内面には口唇部付近に刻み目と幅２㎜の沈線、その下に隆帯３条と幅１㎜の沈線７条が巡り、さらに７条の沈線間の３か所には刻み目も施している。

⑤

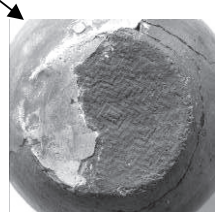
⑥

7　口縁部がやや内湾する小形の鉢（残存 2/3）である。口縁上部に６条の沈線が巡り、沈線間には刻み目を入れている。また、その沈線上には全周で推定４か所（残存３か所）の右回りの渦巻き文がある。

底部中央は上げ底で、編み物痕（素材の幅は経緯とも 1.5～2.0 ㎜）が顕著である。編み物の周辺部分は２越え２潜り１送りと規則的な編み方であるが、中央部分は、４越え３潜り、３越え３潜り、２越え２潜り１送りと不規則な編み方に見える。これは素材の一部が擦り切れて欠損していたか、あるいは底部の中央にあたる部分だけ不規則な編み方がされていたためであろうか。周縁部分は調整されて編み物痕はない。

復元した口径は 11.8cm、底径 6.0cm、器高 7.9cm である。（口絵および下記写真参照）

⑦


底部

不規則に見える編み物痕

第７節　型式が特定できない土器

（第７群１類）

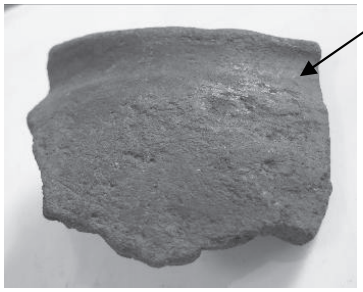
第７群１類の土器を第20～22図に示す。

A種　無文のものである。　（第20図）

1　胴部から口縁部にむかって、ややすぼまる器形の鉢形土器である。口縁部直下を指頭で強く撫でているため外反しており、口唇部は丸みを帯びている。口径は推定で15㎝ある。

2　無文の粗製深鉢で口径は推定で25.6㎝である。

3　無文の粗製深鉢で胴部が極端にくびれた器形をしている。口径は推定で25㎝である。



①

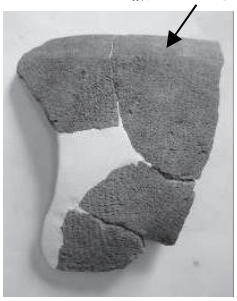
B種　縄文のみを施した粗製土器である。（第21図）

1　施文方法は縄文の押圧のようにも見えるが、やや硬化した器面に縄文を多方向に施文しているようである。縄の端の痕跡が観察できる。

2　口縁部を撫でて無文とし、胴部に縄文を多方向に施文している。内面はナデによる調整をしており比較的丁寧な作りである。

3　口唇部を撫でて平らに調整し、口縁部直下より縄文を施している。内面の調整は粗い。

①



②

C種　縄文以外の文様をもつものである。（第22図）

1～3　櫛歯状の工具による条痕文を施した粗製土器である。**1**、**2**は曲線、**3**は直線的な文様である。**1**はやや肥厚した口縁部をもち口唇部を平らに調整している。内外面とも丁寧なミガキを施す。**2**、**3**は口縁部を欠いており、**2**は内面のみ、**3**は内外面にミガキを施している。

②

⑤

4～6　格子状文を施した粗製土器である。**4**、**5**は口縁部に沈線を巡らし格子状文を描いている。**4**は内外面ともミガキを施し、**5**は内面を撫でているが調整は丁寧ではない。**6**は胎土の砂粒の割合が多く器面が荒れていて、調整はあまり丁寧ではない。格子状文は斜行沈線だけになっている部分が見られ作りは粗雑である。口径は推定で16㎝である。

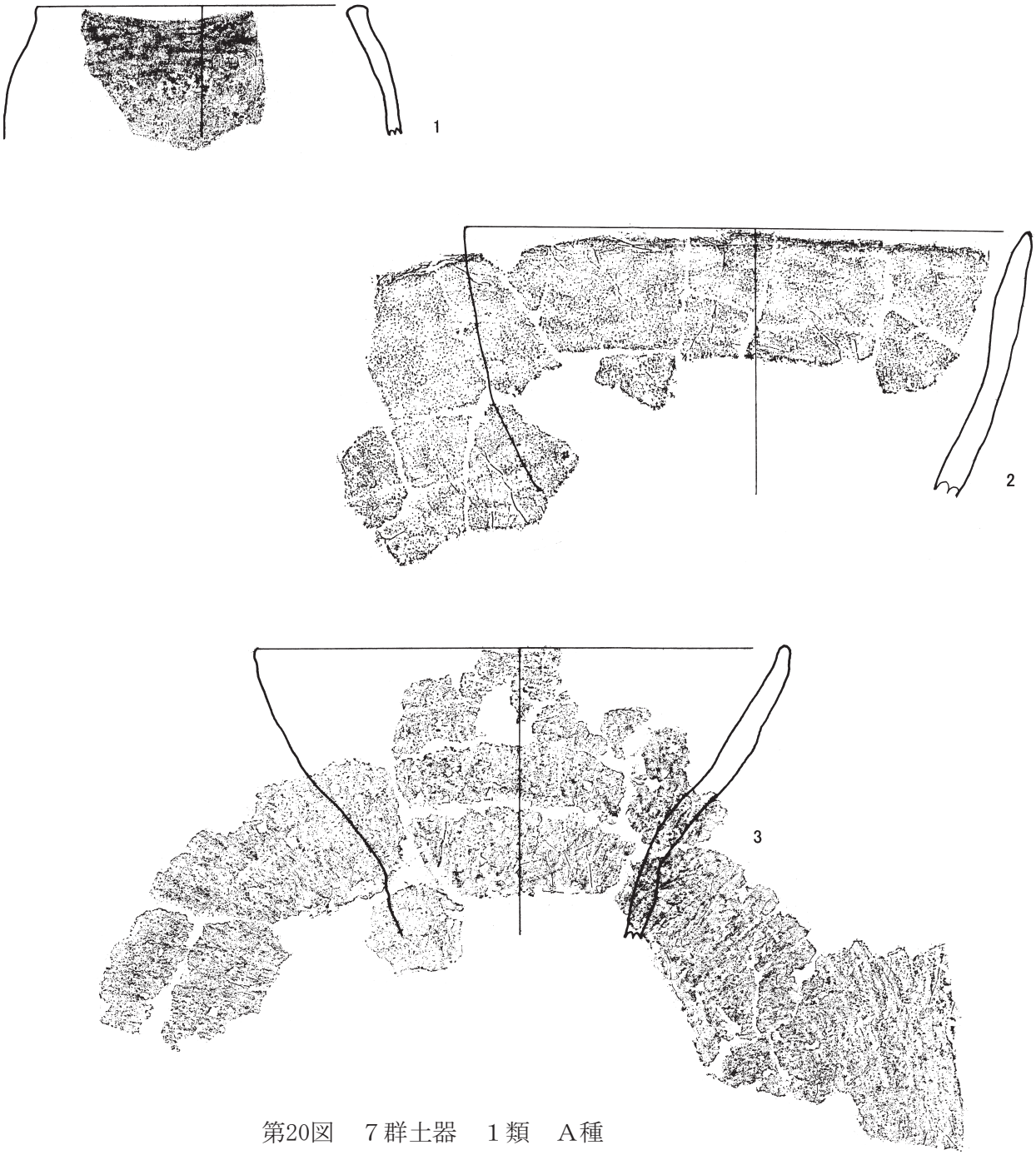
7　横位に指頭条痕を施した条痕文系の粗製土器である。断面の様子から口縁部に沈線が巡っていたと思われる。

⑦

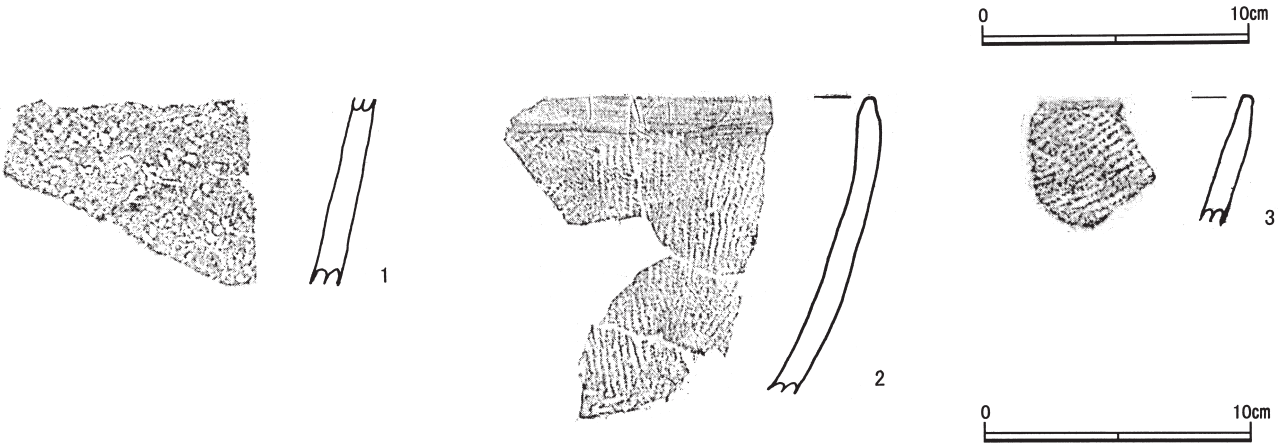
8　丁寧にミガキを施し焼成も良好な土器である。沈線による雷文に似た四角形をモチーフとした文様と思われる。口唇部の上に突き出るように円筒状の隆帯を貼り付け、頂部に竹管による刺突を施している。

⑧

斜め上から見る

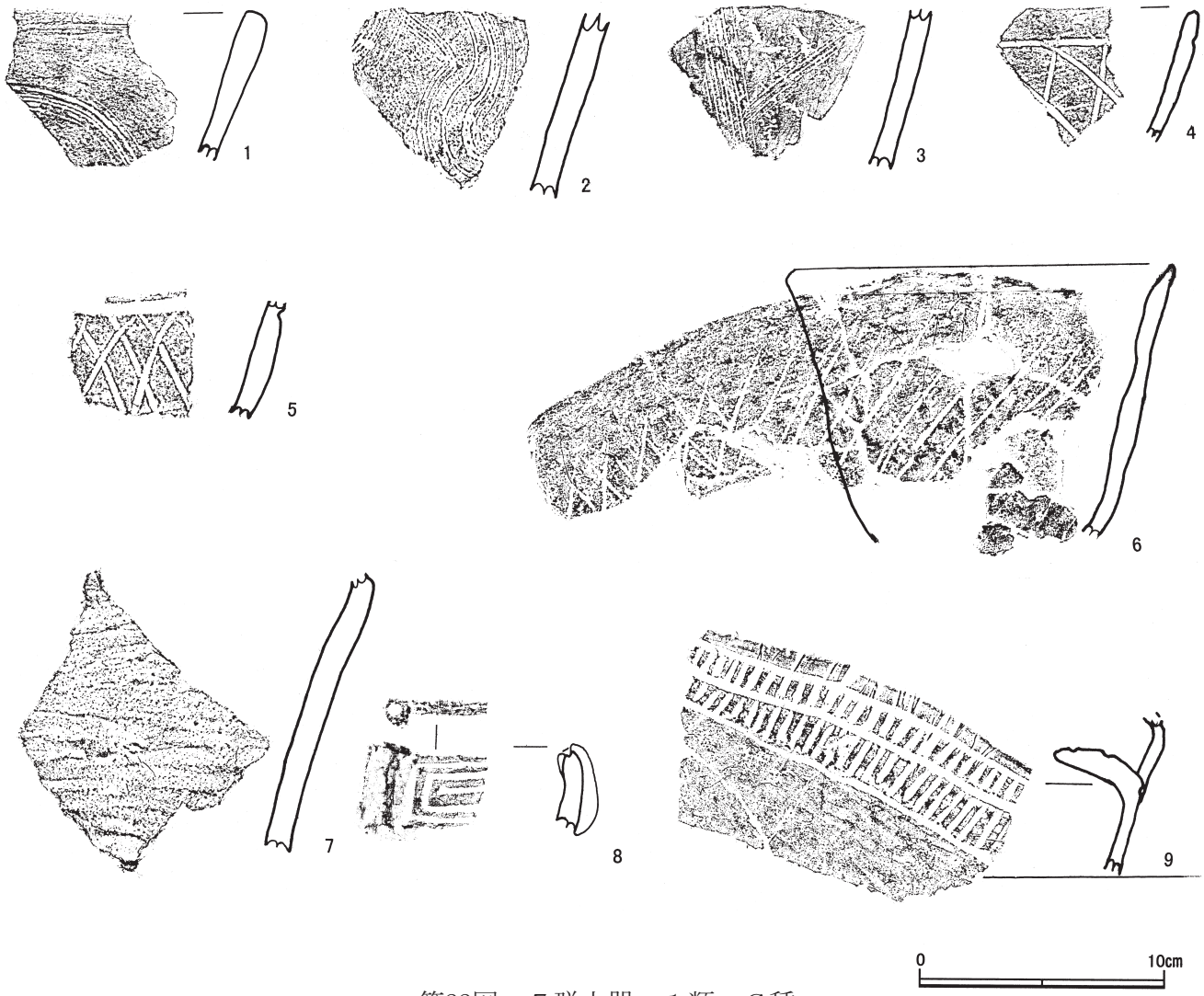


第20図　７群土器　１類　Ａ種



第21図　７群土器　１類　Ｂ種

9　口縁部は大きく内湾しながら、緩やかな波状をしている。横位に３条の沈線を巡らし、その間を等間隔で短沈線を充填している。内外面ともにヘラミガキを施しているがあまり丁寧ではない。この地域によく見られる土器ではなく他地域からの搬入品と思われる。



第22図　７群土器　１類　Ｃ種

第８節　注口土器　（第７群２類）

第７群２類の土器を第23、24図に示す。

１、２、６　注口部の土器片である。**１**は非常に短い注口部で、その上部に短い橋状把手が付いていると思われる。**２**は内側に胴部との装着痕が観察できる。**６**は筒状にした粘土の上に、さらにこれより長い筒状の粘土を被せて、注口部を製作している。このため、胴部に装着する部分は分厚く、先端は薄い。

３　刺突と沈線を施した把手をもつ胴部である。胴部は上部に１条の隆帯を巡らしたほかは無文と思われる。器面はかなり磨滅している。

４　球形の注口土器の胴部である。胴部中央の２本の横位沈線で上部と下部を区画している。下部は無文であるが、上部は帯状に沈線で区画し、その上から細縄文を施した文様構成である。器面はかなり磨滅している。復元した胴部最大径は約21㎝である。

５　かなり大きい球形の注口土器の胴部である。胴部上位に沈線を枠状に巡らせ、その中に横位に粗い縄文と径２㎜の刺突を施している。

１～６は堀之内１式と思われる。

７　胴部中央が屈曲したいわゆる算盤玉形の胴部であるが、注口部は欠損している。胴部中央に隆帯を１条巡らし、その際に上の方だけ沈線を入れている。そのほかは無文と思われる。

⑥

⑦

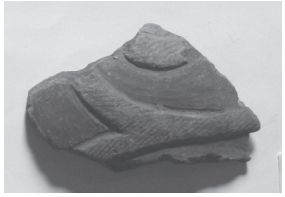
８　いわゆる靴ベラ状の把手を持つ注口土器である。把手の下部には刺突が施され、口縁部には２条の細い平行沈線と刺突を施している。緻密で堅牢な作りである。

９　胴部である。沈線で幾何学的文様の区画を作り、余白に沈線で同じ文様を多重に描いている。また、一部の沈線間には細縄文を施している。

11　胴部中央が屈曲した算盤玉形の胴部である。胴部上位は沈線で区画し縄文を施している。胴部下位は無文と思われる。

12　口縁部に近い胴部である。横位の平行沈線と枠状に区画した中を縄文で充填し、小さい刺突も付けた緻密な文様である。焼成は良好で堅牢な作りである。

13　縄文のある隆帯を貼付した胴部で、隆帯の両脇に沿ってさらに沈線を施している。

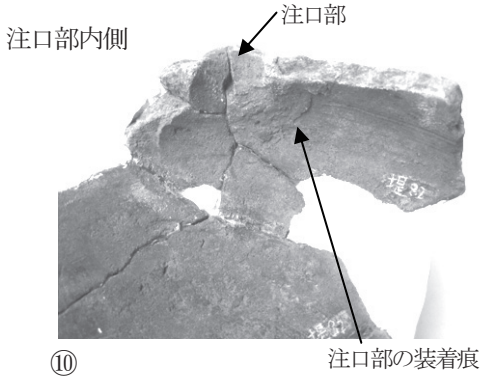


⑬

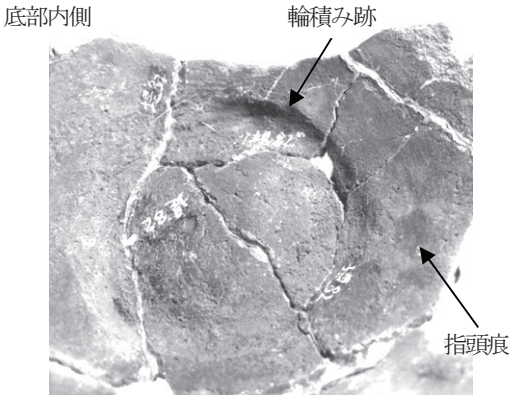
７～９、11～13は堀之内２式と思われる。

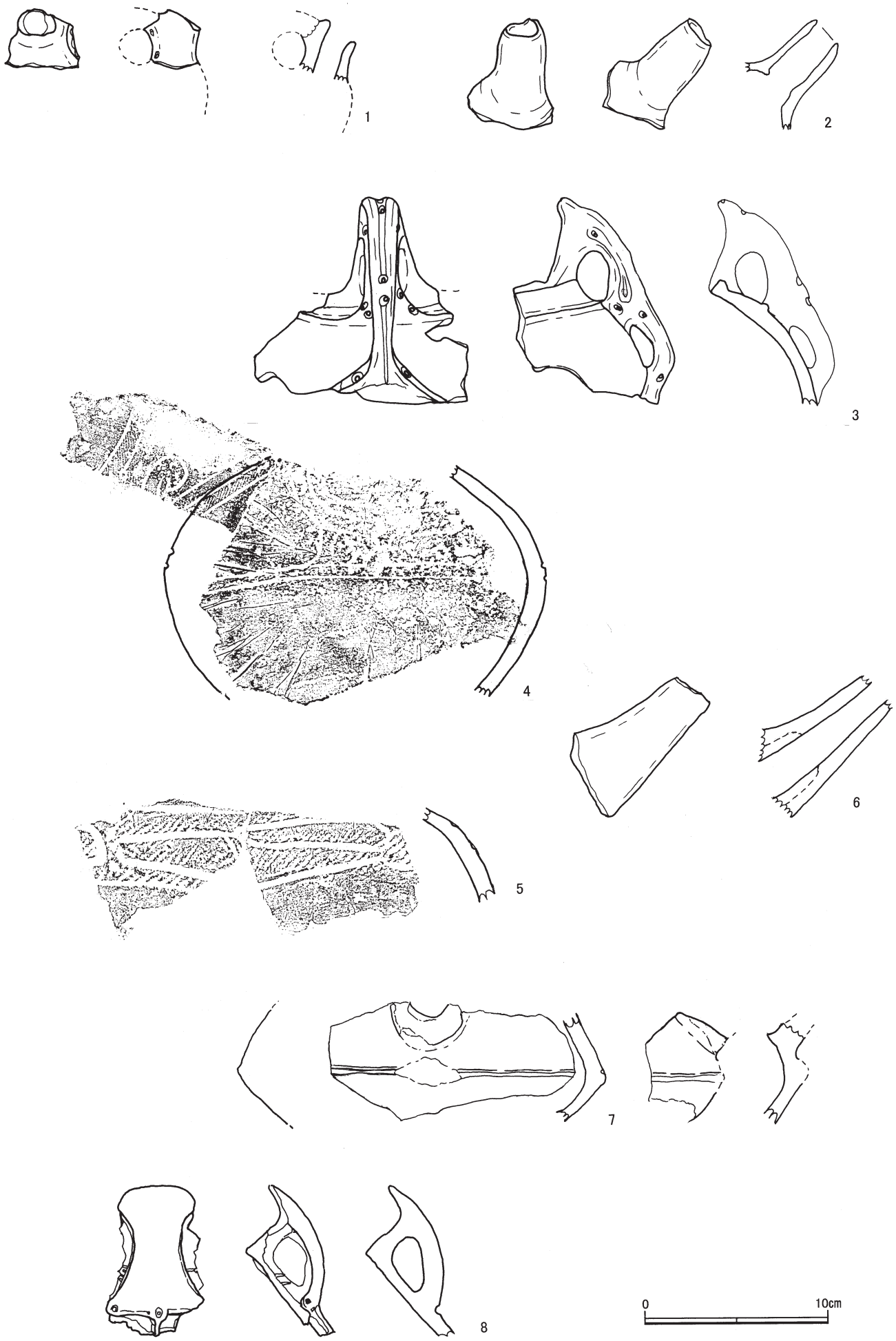
10　長い頸部と高台のような張り出した底部を持ち、胴部下方に最大径を持つ注口土器である。復元した口径は8.6㎝、胴部最大径15.9㎝、底径8.8㎝、器高15.6㎝である。頸部には沈線８条と隆帯１条を横位に巡らせ、処々に豆粒状の貼付文と縦位の隆帯を施している。把手は頸部に付帯し、把手と注口部の間には沈線で渦巻き文を描いている。（口絵写真参照）

胴部内面には注口部の装着痕がある。底部から胴部の立ち上がり部分を内側から観察すると、円盤状粘土板の底部の上に粘土を輪積みし、底部の際から指頭で強く押さえて胴部を張り出させているのがわかる。（下の写真参照）



⑩

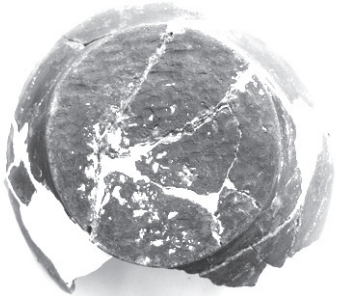




第23図　７群土器　２類（１）

底部は編み物痕が顕著である。編み物は素材幅経緯とも２～３㎜で、１越え２潜り１送りと思われる。器壁は薄く、黒光りのした緻密で堅牢な作りである。茨城県稲敷市福田貝塚出土の注口土器に類似している。

⑩



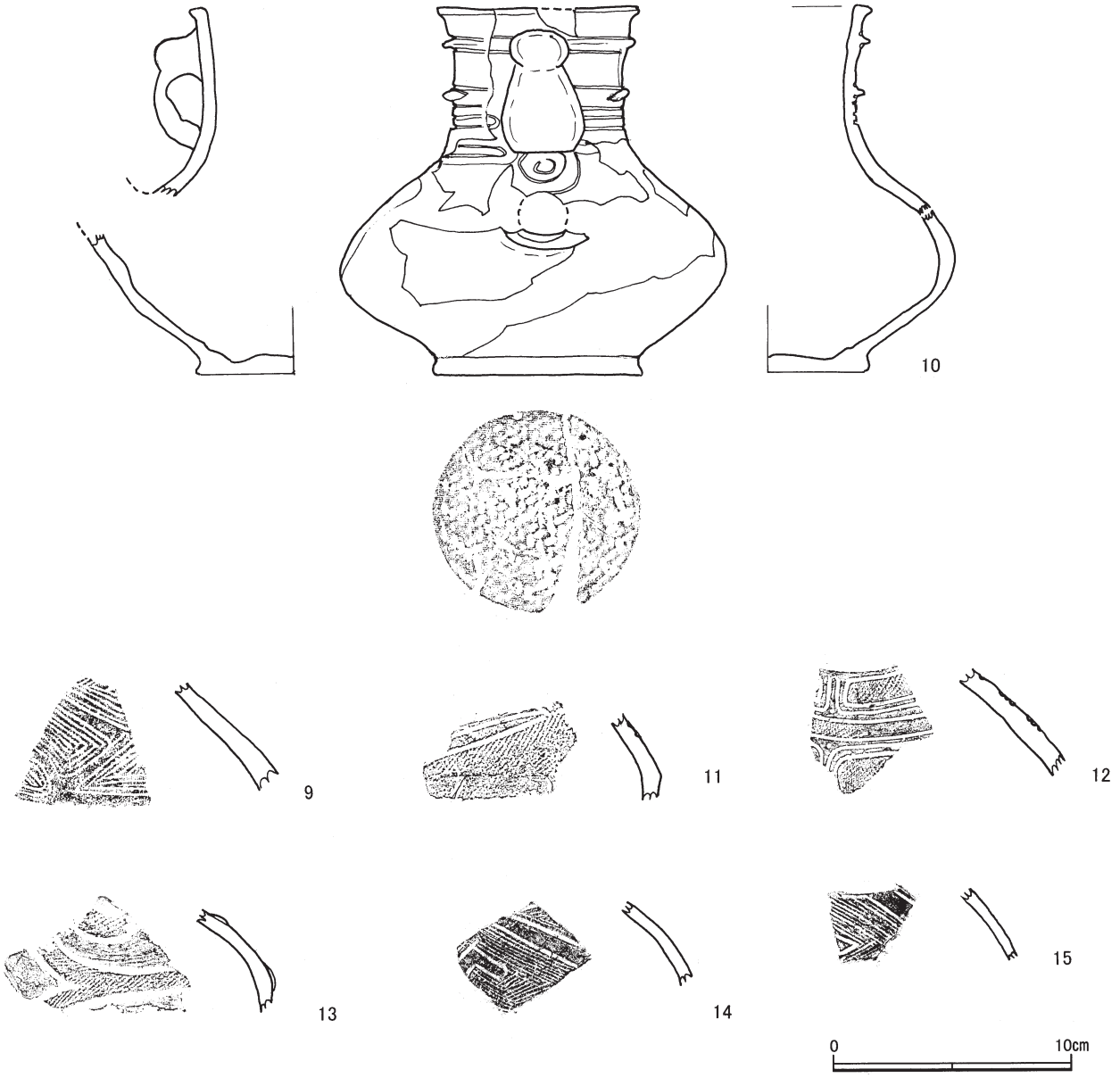
編み物痕

14、15　この２片は接合できないが、同一個体と思われる。小さい球形の注口土器の胴部である。文様は、菱形に区画した中に櫛歯状工具による細線を充填し緻密である。器壁は非常に薄く、焼成良好で堅牢な作りである。

10、14、15 は加曽利Ｂ１式と思われる。

⑭

⑮



第24図　７群土器　２類（２）

第９節　把手部・突起部（第７群３類）

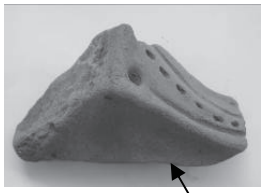
第７群３類の土器を第25図に示す。

ただし今回は突起部のみである。

1　口縁部を大きく内側に折り曲げた波状口縁をもつ称名寺式と思われる深鉢の突起部で、その頂上に大きく深い刺突を施し、側面は刺突と沈線で文様をつけ外面には沈線と充填縄文で、下部は欠損しているが三角形のモチーフの文様を施していると思われる。

2　波状口縁をもつ称名寺式の浅鉢と思われる。口唇部に１条の太い沈線を引き、口縁部には頂部近くに刺突を施し、折り曲げた口縁に沿って２条の沈線を引いてその間に刺突文を連続して施している。外面に指頭による整形痕が観察できる。

①

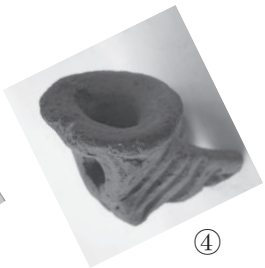


②　外面

3　波状口縁の頂部付近と思われるが、かなり欠損している。側面に文様は見られない。外面に波頂部に向けて細い隆帯を貼り付け、沈線と刺突で蕨手状の文様を施している。称名寺式終末から堀之内１式と思われる。

4　波状口縁をもつ浅鉢の先端に付く擬注口である。頂上部に大きく深い刺突を施しているが貫通はしていない。外面は刺突を施し、その両側を数条の斜線文で装飾している。

③



④

5　突起部を横に貫通する孔があり、頂部に深い刺突を施している。

6　渦巻き状の突起で、その中心に刺突を施している。

4～**6**は堀之内１式と思われる。**5**と**6**はよく磨かれていて堅緻である。

⑤

⑥

7　堀之内２式の浅鉢の突起部と思われる。突起頂部は円形で、沈線による渦巻文がある。外面は刻みのある細い隆帯を口縁部から斜位に施している。内面は蛇行沈線と、沈線間に細かい刻みを入れた文様を施している。

8　Ａ字形状の突起部で、大きな貫通孔を中心に内外面とも刺突と沈線で文様を施している。側面の片側にも一か所の刺突とそこから垂下する沈線がある。
称名寺式終末から堀之内１式と思われる。

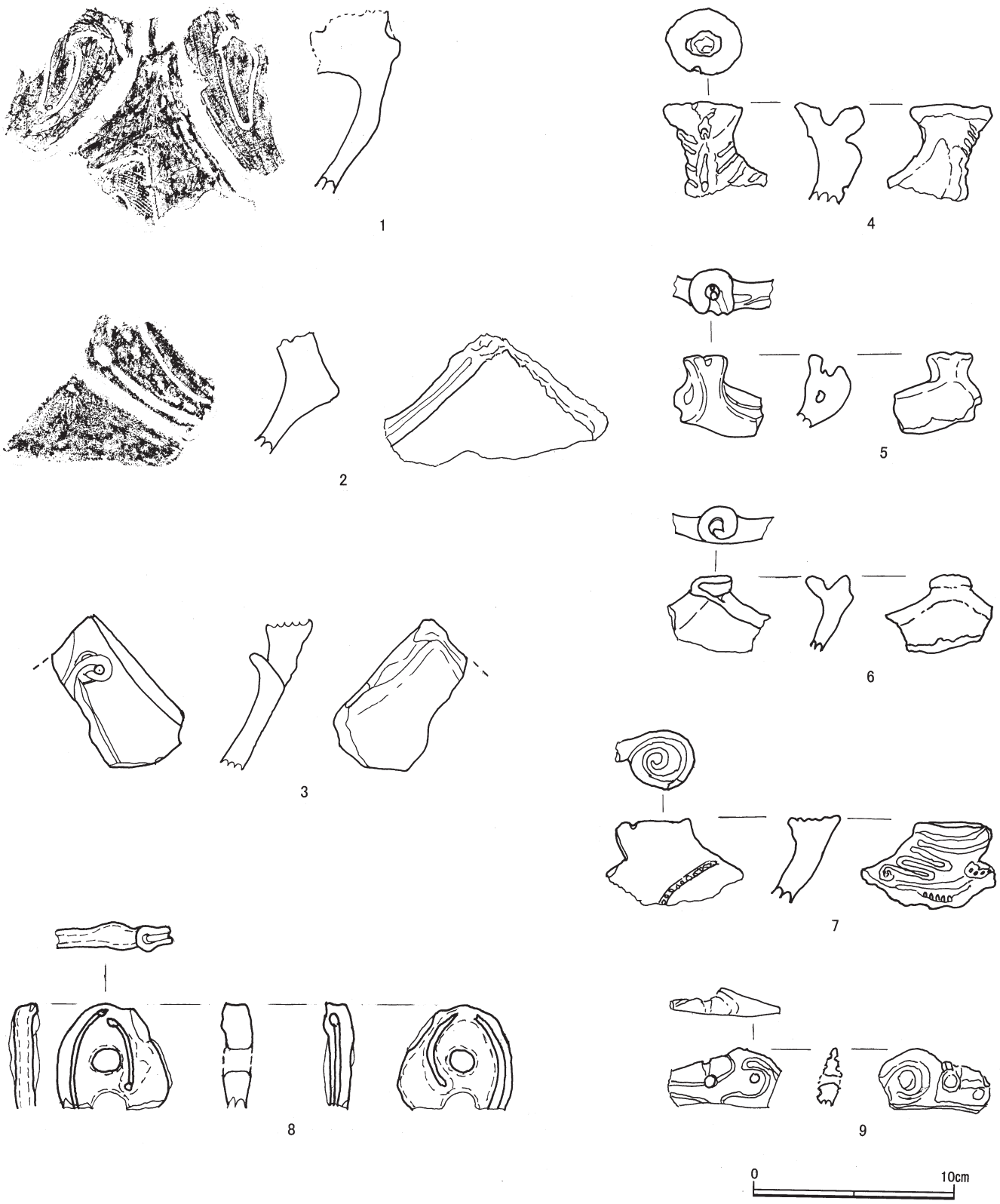
⑦（内面）

⑧

9　横に並ぶ２つの貫通孔をもち、外面は曲線的な沈線、内面は刺突と沈線で文様を施している。堀之内１式と思われる。

⑨（外面）

⑨（内面）



第25図　７群土器　３類

第10節　土器底部（第７群４類）

第７群４類の土器底部を第26図に示す。

底部の総個数は小片を含め 103 点である。この内、無文のものが 86 点（83%）を占め、編み物痕および圧痕のあるものは17点である。

ここでは無文のもの６点と編み物痕６点および圧痕のあるもの２点(木葉痕、その他)を取り上げる。

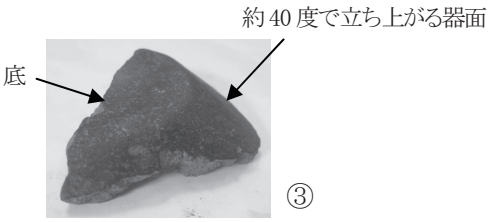
無文のもの

1　底径7.2㎝、底部の厚さ６㎜、器面は内外とも丁寧に仕上げてある。残存高は、立ち上りを含め僅か1.3㎝であるが、立ち上がり部は棒状工具を使用し滑らかに仕上げている。底部は磨耗している。

①

2　底径９㎝、底部の厚さ1.5㎝、器面調整は粗く、僅かに上げ底で周縁部は擦り減っている。

3　底径は推定で6.2㎝、底部の厚さ６㎜の底部から胴部の土器片である。底部から胴部は斜め約 40 度に立ち上がる。内面は暗褐色であるが、外面は黒褐色で丁寧に器面調整をしている。僅かに上げ底で外周を丁寧に磨いている。

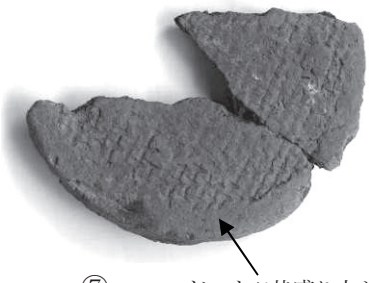


③

4～6　器形は鉢形と思われる。**4**、**5**は内外面とも仕上げが粗く、**6**は丁寧に仕上げてある。**4**は焼成も良くない。

編み物痕、圧痕があるもの

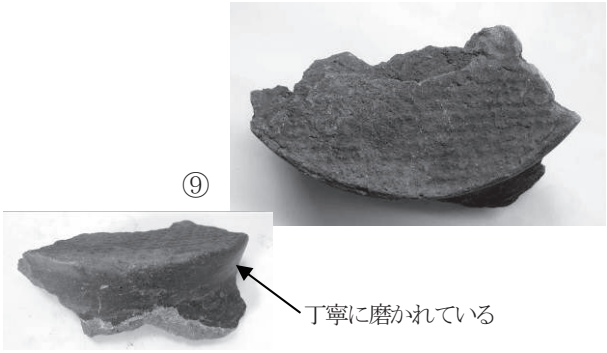
7　底径は推定で 10cm、内面は黒褐色で焼成は良好である。1 越え２潜り１送りの編み物痕がある。僅かに上げ底で、底部周縁部はドーナツ状に盛り上がる無文帯がある。



⑦

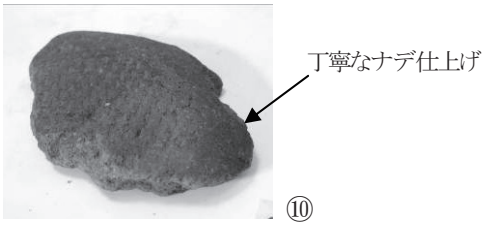
8　底部の厚さ９㎜で、内面の仕上げは良好であり、底部外面には１越え２潜り１送りと思われる編み物痕が見られる。

9　底径は推定で13.5㎝、底部の厚さ14㎜、残存胴部の厚さ８㎜、内外面とも黒褐色で焼成も良好である。器面は艶があり丁寧に磨いている。かなり精製された土器である。１越え２潜り１送りと思われる編み物痕が見られる。



⑨

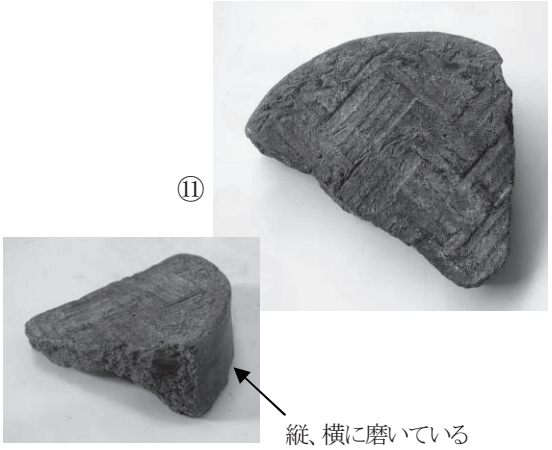
10　底径約８㎝、底部の厚さ６㎜、底部から緩やかに立ち上がっている。内外面の仕上げは良好である。1 越え２潜り１送りの編み物痕が見られ、周縁部は丁寧に撫でて仕上げている。



⑩

11　底径は推定で 10.8 ㎝、底部の厚さ 10 ㎜、外面の仕上げは良好で、内面には炭化物の付着が見える。

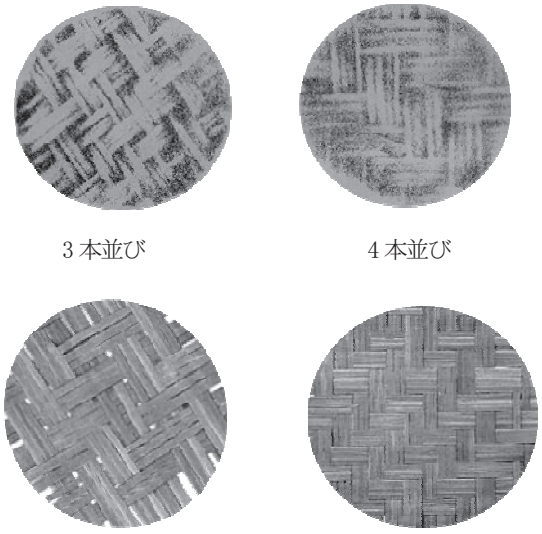
編み物痕がある。編み物の素材はやや不揃いで幅 3～4 ㎜、硬く断面がかまぼこ状になっているものを、経・緯条とも３～４本並べを 1 単位として幅 12～15 ㎜の太い条を作り、それを２越え２潜り１送りに編んだものと思われる。底部の立ち上り部の外面には縦、横に磨きを施している。



長沢宏昌氏の報告書*を参考に実験した。

幅２～４㎜、断面は僅かにかまぼこ状で厚さ 1.5 ㎜の籠編み用竹材を用いて３または４本並べで太い条を作り、それを網代編みにし、粘土に押圧した。

粘土に押圧した跡

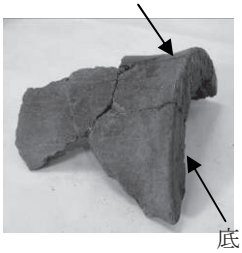


試作した網代編み

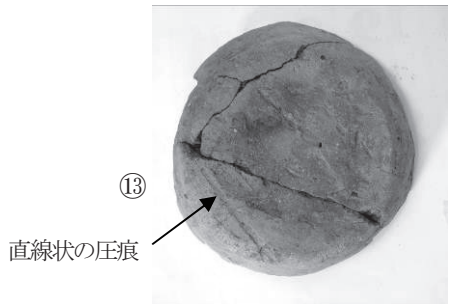
＊参考資料「都留市中谷遺跡出土の縄文土器底部圧痕について」長沢宏昌　図４−№43、図５−№50　1997　山梨県立歴史博物館

12　残存高さ９㎝、底径は推定で 11.5 ㎝の底部周縁の一部である。胴部外面は底部の立ち上り部の磨きが丁寧である。鉢形土器と思われる。1 越え 2 潜り 1 送りの編み物痕が見られる。

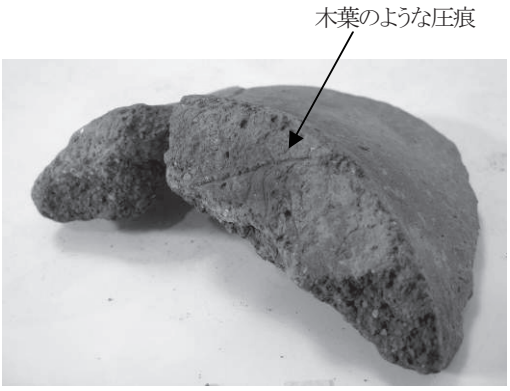
⑫



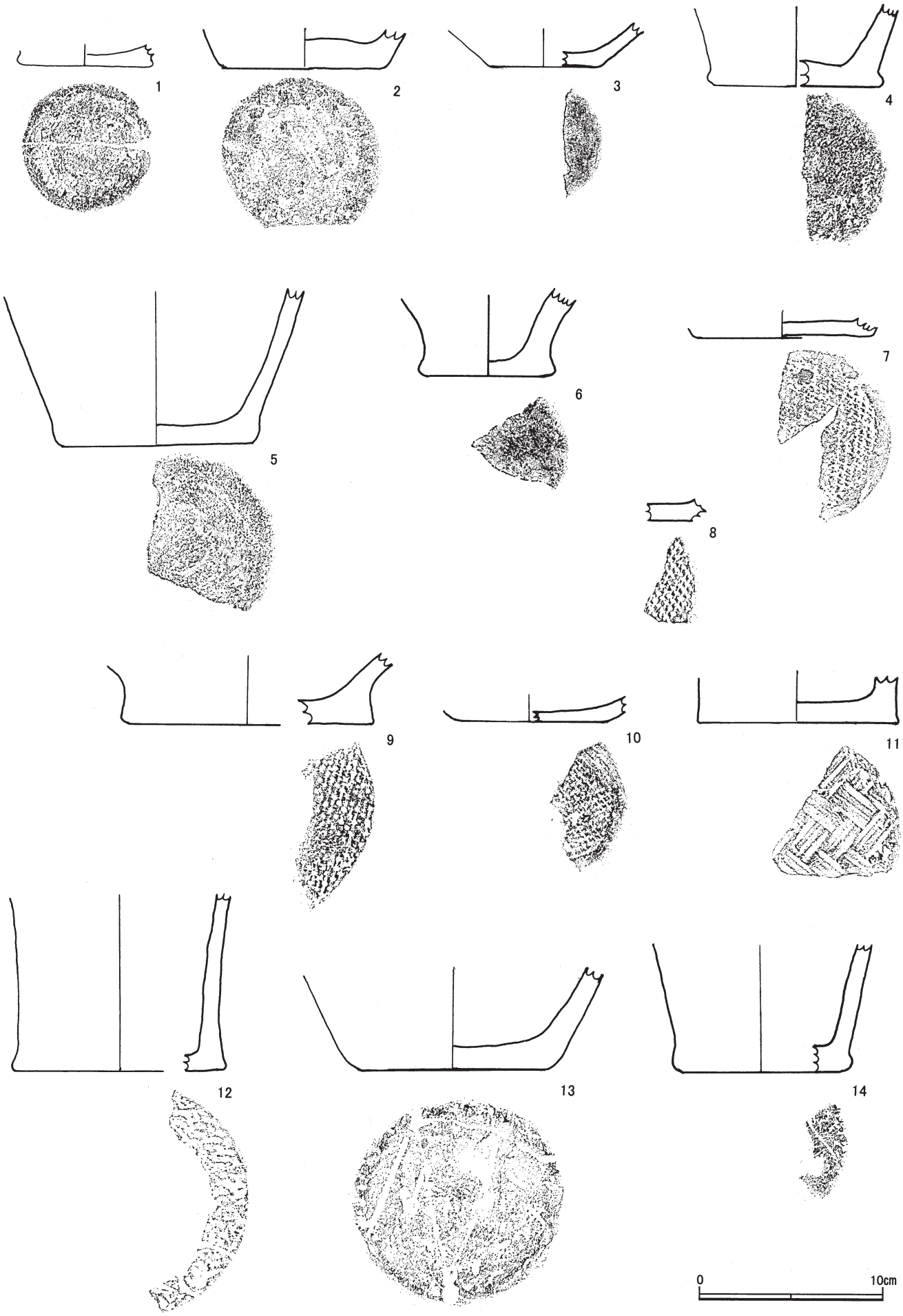
13　底径 11.5 ㎝、鉢形土器と思われる。器面仕上げの磨きは丁寧ではない。幾つかの圧痕が見られるが、おそらく竹や草の茎の上に置いたときに付いた圧痕と思われる。



14　底径は推定で 10.0 ㎝、焼成は脆いが、器面仕上げはやや良好である。編み物痕ではなく木葉痕のような幾つかの圧痕が見られるが、土器片の大きさが十分でなく判断できない。



⑭



第26図　７群土器　４類

第11節　古代以降の土器（第８群）

第８群は第１～10 節までの各群に属さない古代以降の土器・磁器であり、第27図に示す。

この調査で出土した土師器は甕の破片が６点(70ｇ)、坏片が 10 点（65ｇ）であるがいずれも細片で、かろうじて口縁が残る２点の坏を図示した。また須恵器は壺の破片が２点（65ｇ）、坏片も２点（15ｇ）出土しているが、そのうち壺の１点を図示した。瓦質土器と青磁は図示した各１点のみの出土である。

１、２　土師器の坏の口縁部である。器面が摩耗しているが相模型の坏と思われる。

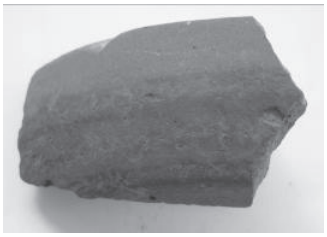
①

②

３　須恵器の壺の肩部である。内外面ともナデ調整で外面に灰オリーブ色の自然釉が付着している。

４　瓦質土器の盤の一部と思われる。口径は推定で17.4 ㎝である。

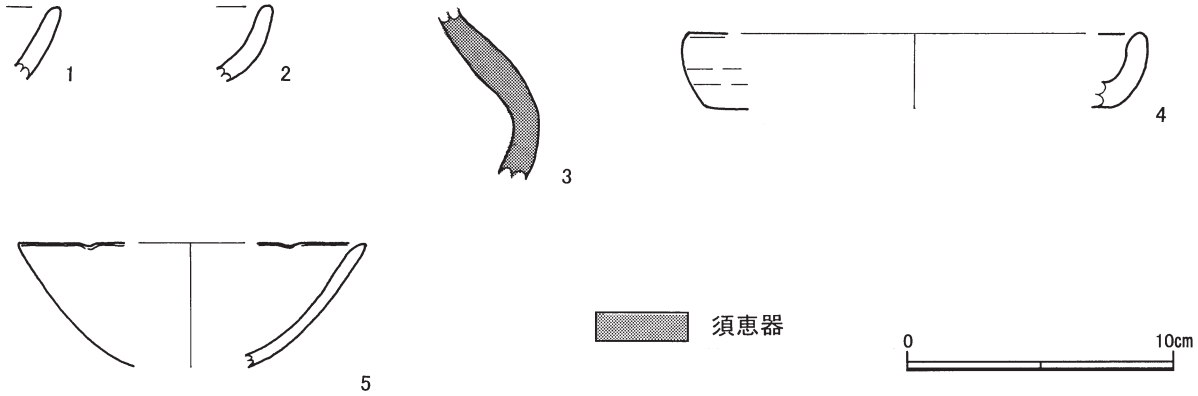
③


④

５　青磁の輪花碗である。口径は推定で 13.2 ㎝である。釉薬は厚さ１㎜程かかり、色調は灰色がかった淡い青緑色で粗い貫入が入る。中国からの舶載品である。

１～３は古代、**４**、**５**は中世のものである。

⑤



第27図　８群土器

第１表　土器観察表

注:口径( )内数値は推定値

土器分類			番号	土器形式	部 位	色 調	備　　考
群	類	種					
2			1	(前期)	口縁	灰褐色	胎土に繊維を含む 縄文RL
2			2	(前期)	口縁	褐色	胎土に繊維を含む 縄文RL
2			3	(前期)	口縁	灰褐色	胎土に繊維を含む 縄文LR 波状口縁 突起
2			4	黒浜	胴	明褐色	胎土に繊維を含む 縄文RL
3			1	勝坂	胴	赤褐色	隆帯 キャタピラ文
3			2	勝坂	胴	灰褐色	隆帯 太陽文
3			3	勝坂	胴	明褐色	隆帯 渦巻き文
4			1	称名寺	胴	黄褐色	
4			2	称名寺	胴	黒褐色	縄文LR
4			3	称名寺	胴	黒褐色	
4			4	称名寺	胴	褐色	隆帯
4			5	称名寺	胴	鈍い褐色	隆帯
4			6	称名寺	口縁	赤褐色	
4			7	称名寺	口縁	明褐色	隆帯
4			8	称名寺	口縁	暗褐色	隆帯
4			9	称名寺	口縁	褐色	貫通孔 突起
4			10	称名寺	胴	褐色	
5	1		1	堀之内1	口縁	赤褐色	8字状貼付文
5	1		2	堀之内1	口縁	赤褐色	8字状貼付文 注口 2と3は同一個体
5	1		3	堀之内1	突起	赤褐色	突起部 橋状把手付き 2と3は同一個体
5	1		4	堀之内1	口縁	赤褐色	
5	1		5	堀之内1	口縁	赤褐色	
5	1		6	堀之内1	口縁	褐色	突起 炭化物付着
5	1		7	堀之内1	口縁	黒褐色	突起 貫通孔 隆帯 炭化物付着
5	1		8	堀之内1	口縁	暗褐色	突起 隆帯
5	1		9	堀之内1	口縁	灰褐色	突起 貫通孔 隆帯
5	1		10	堀之内1	口縁	黒色	突起 貫通孔 隆帯
5	1		11	堀之内1	口縁	暗褐色	突起 8字状貼付文 隆帯
5	1		12	堀之内1	口縁	黒褐色	隆帯
5	1		13	堀之内1	口縁	桃褐色	突起 貫通孔 隆帯
5	1		14	堀之内1	口縁	桃褐色	突起 貫通孔
5	1		15	堀之内1	口縁	褐色	突起
5	1		16	堀之内1	口縁	黒褐色	突起
5	2	A	1	堀之内1	口縁～胴	褐色	突起 貫通孔 口径(34)㎝ 残存高29㎝
5	2	A	2	堀之内1	口縁	暗褐色	
5	2	A	3	堀之内1	口縁	褐色	突起
5	2	A	4	堀之内1	口縁	褐色	突起 貫通孔
5	2	A	5	堀之内1	口縁	黒褐色	突起 貫通孔 把手痕
5	2	A	6	堀之内1	口縁	黒色	突起 貫通孔 隆帯
5	2	A	7	堀之内1	口縁	黒褐色	
5	2	A	8	堀之内1	口縁	褐色	
5	2	B	1	堀之内1	胴	褐色	
5	2	B	2	堀之内1	胴	灰褐色	円形貼付文

土器分類			番号	土器形式	部 位	色 調	備　　考
群	類	種					
5	2	B	3	堀之内1	胴	赤褐色	
5	2	B	4	堀之内1	胴	赤褐色	8字状貼付文
5	2	B	5	堀之内1	胴	赤褐色	
5	2	B	6	堀之内1	胴	褐色	
5	2	B	7	堀之内1	胴	灰褐色	隆帯
5	2	B	8	堀之内1	胴	灰褐色	
5	2	B	9	堀之内1	胴	灰褐色	
5	2	B	10	堀之内1	胴	褐色	
5	2	B	11	堀之内1	胴	黒褐色	
5	2	B	12	堀之内1	胴	褐色	相模系沈線文土器
5	2	B	13	堀之内1	胴	灰褐色	
5	2	B	14	堀之内1	胴	暗褐色	
5	3	A	1	堀之内1	口縁～胴	赤褐色	突起　貫通孔　縄文LR　隆帯　橋状把手　口径38cm　残存高23cm
5	3	A	2	堀之内1	口縁	黒褐色	縄文LR
5	3	A	3	堀之内1	口縁	橙褐色	縄文LR
5	3	A	4	堀之内1	口縁～胴	褐色	突起　貫通孔　縄文LR　口径(22)cm　残存高18cm
5	3	A	5	堀之内1	口縁	黒褐色	8字状貼付文　縄文LR
5	3	A	6	堀之内1	口縁	灰褐色	地縄文 LR
5	3	A	7	堀之内1	口縁	黒褐色	地縄文 LR　口径(10)cm　小形土器
5	3	A	8	堀之内1	口縁	黒色	突起　地縄文LR
5	3	B	1	堀之内1	胴	赤褐色	隆帯　縄文LR
5	3	B	2	堀之内1	胴	黄褐色	縄文LR　2と3は同一個体
5	3	B	3	堀之内1	胴	黄褐色	縄文LR　2と3は同一個体
5	3	B	4	堀之内1	胴	灰褐色	縄文LR
5	3	B	5	堀之内1	胴	褐色	縄文LR
5	3	B	6	堀之内1	胴	灰褐色	8字状貼付文　縄文LR
5	3	B	7	堀之内1	胴	褐色	隆帯　円形貼付文　縄文LR
5	3	B	8	堀之内1	胴	灰褐色	隆帯　縄文LR
5	3	B	9	堀之内1	胴	褐色	地縄文LR
5	3	B	10	堀之内1	胴	灰褐色	縄文LR
5	3	B	11	堀之内1	胴	褐色	地縄文LR
5	3	B	12	堀之内1	胴	褐色	縄文LR
5	3	B	13	堀之内1	胴	褐色	縄文LR
5	3	B	14	堀之内1	胴	灰褐色	縄文LR
5	4		1	堀之内2	口縁～底	褐色	1越え2潜り1送りの編み物痕　器高14.5cm　口径28.5cm　底径9cm
5	4		2	堀之内2	口縁	灰褐色	
5	4		3	堀之内2	胴	暗褐色	相模系沈線文土器
5	4		4	堀之内2	胴	黄褐色	相模系沈線文土器
5	4		5	堀之内2	胴	明褐色	円形貼付文
5	5		1	堀之内2	胴～底	明褐色	縄文LR　2越え2潜り1送りの網代痕　底径9cm
5	5		2	堀之内2	口縁	赤褐色	縄文LR
5	5		3	堀之内2	口縁	黒褐色	縄文LR
5	5		4	堀之内2	口縁	赤褐色	地縄文LR
5	5		5	堀之内2	胴	褐色	縄文LR

土器分類			番号	土器形式	部 位	色 調	備　　考
群	類	種					
5	5		6	堀之内2	胴	赤褐色	縄文LR
5	5		7	堀之内2	胴	赤褐色	縄文LR
5	5		8	堀之内2	胴	暗褐色	縄文LR
5	5		9	堀之内2	胴	暗褐色	縄文LR
5	6		1	堀之内2	口縁	褐色	突起　隆帯　8字状貼付文
5	6		2	堀之内2	口縁	褐色	口唇部に押捺　円形貼付文
5	6		3	堀之内2	口縁	黒褐色	突起　8字状貼付文
5	6		4	堀之内2	胴	暗褐色	隆帯　8字状貼付文
5	7		1	堀之内2	口縁～胴	褐色	縄文LR　隆帯　8字状貼付文　内面に文様　口径31cm
5	7		2	堀之内2	口縁～胴	赤褐色	縄文LR　8字状貼付文　口径24.5cm
5	7		3	堀之内2	口縁、胴	黒色、褐色	縄文LR　隆帯
5	7		4	堀之内2	口縁	褐色	縄文LR　隆帯　8字状貼付文
5	7		5	堀之内2	胴	暗褐色	縄文LR　隆帯
5	7		6	堀之内2	胴	褐色	縄文LR　隆帯
5	8		1	堀之内2	口縁	灰褐色	隆帯　突起
5	8		2	堀之内2	口縁	黒褐色	突起
5	8		3	堀之内2	口縁	褐色	突起
6			1		口縁	褐色	内側は黒褐色　刺突列
6			2	堀之内2	口縁	明褐色	縄文LR　刺突列　指頭痕
6			3	～加曽利	口縁	黒褐色	内側は暗褐色　縄文LR
6			4		口縁	暗褐色	縄文LR　波頂部または突起
6			5	加曽利B1	口縁	暗褐色	刺突列
6			6	加曽利B1	口縁	暗褐色	隆帯
6			7	加曽利B1	口縁～底	暗褐色	刻み目　編み物痕　残存は2/3
7	1	A	1		口縁	暗褐色	口径(15)cm
7	1	A	2		口縁～胴	黒褐色	口径(25.6)cm
7	1	A	3		口縁～胴	褐色	口径(25)cm
7	1	B	1		胴	灰褐色	縄文LR
7	1	B	2		口縁～胴	黄褐色	縄文LR
7	1	B	3		口縁	灰褐色	縄文LR
7	1	C	1		口縁	暗褐色	
7	1	C	2		胴	褐色	
7	1	C	3		胴	褐色	
7	1	C	4		口縁	明褐色	
7	1	C	5		胴	明褐色	
7	1	C	6		口縁～胴	暗褐色	口径(16)cm
7	1	C	7		胴	褐色	
7	1	C	8		口縁	褐色	隆帯
7	1	C	9		口縁	暗褐色	波状口縁
7	2		1	堀之内1	注口	灰褐色	
7	2		2	堀之内1	注口	褐色	
7	2		3	堀之内1	胴、把手	鈍い黄橙色	刺突　隆帯
7	2		4	堀之内1	胴	鈍い黄橙色	縄文LR
7	2		5	堀之内1	胴	灰褐色	縄文LR

土器分類			番号	土器形式	部 位	色 調	備　　考
群	類	種					
7	2		6	堀之内1	注口	暗褐色	
7	2		7	堀之内2	注口	灰黄褐色	算盤玉形
7	2		8	堀之内2	胴、把手	赤褐色	靴ベラ状把手
7	2		9	堀之内2	胴	明褐色	多重沈線
7	2		10	加曽利B1	口縁～底	明褐色	編み物痕　隆帯　残存は2/3
7	2		11	堀之内2	胴	赤褐色	縄文LR　算盤玉形
7	2		12	堀之内2	胴	鈍い赤褐色	縄文LR　刺突
7	2		13	堀之内2	胴	暗褐色	縄文LRのある隆帯
7	2		14	加曽利B1	胴	灰褐色	14・15は同一個体　多重沈線
7	2		15	加曽利B1	胴	暗褐色	14・15は同一個体　多重沈線
7	3		1		突起	黄褐色	縄文LR　波状口縁
7	3		2		突起	明褐色	波状口縁
7	3		3		突起	明褐色	波状口縁　隆帯
7	3		4		突起	褐色	
7	3		5		突起	褐色	貫通孔
7	3		6		突起	褐色	
7	3		7		突起	黄褐色	隆帯
7	3		8		突起	赤褐色	貫通孔
7	3		9		突起	黄褐色	貫通孔
7	4		1		底	褐色	無文　底径7.2cm
7	4		2		底	赤褐色	無文　底径9.0cm
7	4		3		底	暗褐色	無文　底径(6.2)cm　外面に炭化物
7	4		4		底	暗褐色	鉢形土器　無文　底径(9.0)cm
7	4		5		底	暗褐色	鉢形土器　無文　底径(10.0)cm
7	4		6		底	赤褐色	鉢形土器　無文　底径(8.5)cm
7	4		7		底	赤褐色	1越え2潜り1送りの編み痕　底径(10.0)cm　内面に炭化物
7	4		8		底	橙褐色	1越え2潜り1送りの編み痕あり
7	4		9		底	黒褐色	注口又は浅鉢土器　1越え2潜り1送りの編み痕　底径(13.5)cm
7	4		10		底	赤褐色	1越え2潜り1送りの編み痕あり　底径(8.0)cm
7	4		11		底	赤褐色	2越え2潜り1送りの網代痕あり　底径(10.8)cm
7	4		12		底	橙褐色	鉢形土器　1越え2潜り1送りの編み痕あり　底径(11.5)cm
7	4		13		底	橙褐色	鉢形土器　圧痕あり　底径11.0cm
7	4		14		底	橙褐色	鉢形土器　圧痕あり　底径(10.0)cm
8			1		口縁	黄褐色	土師器　坏
8			2		口縁	黄褐色	土師器　坏
8			3		胴	暗灰色	須恵器　壺
8			4		口縁～胴	黒色	瓦質土器盤　口径(17.4)cm
8			5		口縁～胴	淡青緑色	青磁輪花碗　口径(13.2)cm

第３章　土器片錘（第28図）

報告対象とした土器片錘は16点で、完形品８点（**1**～**8**）と欠損品８点（**9**～**16**）である。

形状は隅丸長方形が15点、隅丸方形が１点で隅丸長方形が圧倒的に多い。土器片錘は土器を二次使用したものであり、元の土器の部位別でみると、胴部15点、胴部から底部にかけてのものが１点である。

元の土器の作られた時期が明らかなのは堀之内式期の２点（**6**、**10**）のみで、他の14点は文様が局部的か、無いので特定できなかった。

糸掛け痕は１点（**6**）を除いて15点は明瞭である。切込みは全て長軸方向のみにあるが**6**のみ狭くて浅い。

土器片錘としての仕上げは１点（**11**）を除き、完形品、欠損品とも側面が整形されているが、特に**6**、**8**、**13**、**14**は丁寧に仕上げられている。**11**のみは土器片を適当な大きさに割って、切込みを入れただけのようである。

1　底部から胴部にかけての部位を用いたものである。堤貝塚の1979年および1959年・1962年の調査ではこのような部位からなる土器片錘は出土していない。一般的に土器底部を使った土器片錘は少ないとされている。

6　刻みを施した厚さ５㎜の隆帯と沈線とが見られる。長軸両端にある切込みは斜めを向いており、隆帯の側面で糸を支えることを意識したものと思われる。

10　８字状貼付文、縄文、沈線が施されている。

15　細い６本以上の櫛描文が施されている。

9、**16**　沈線が施されている。

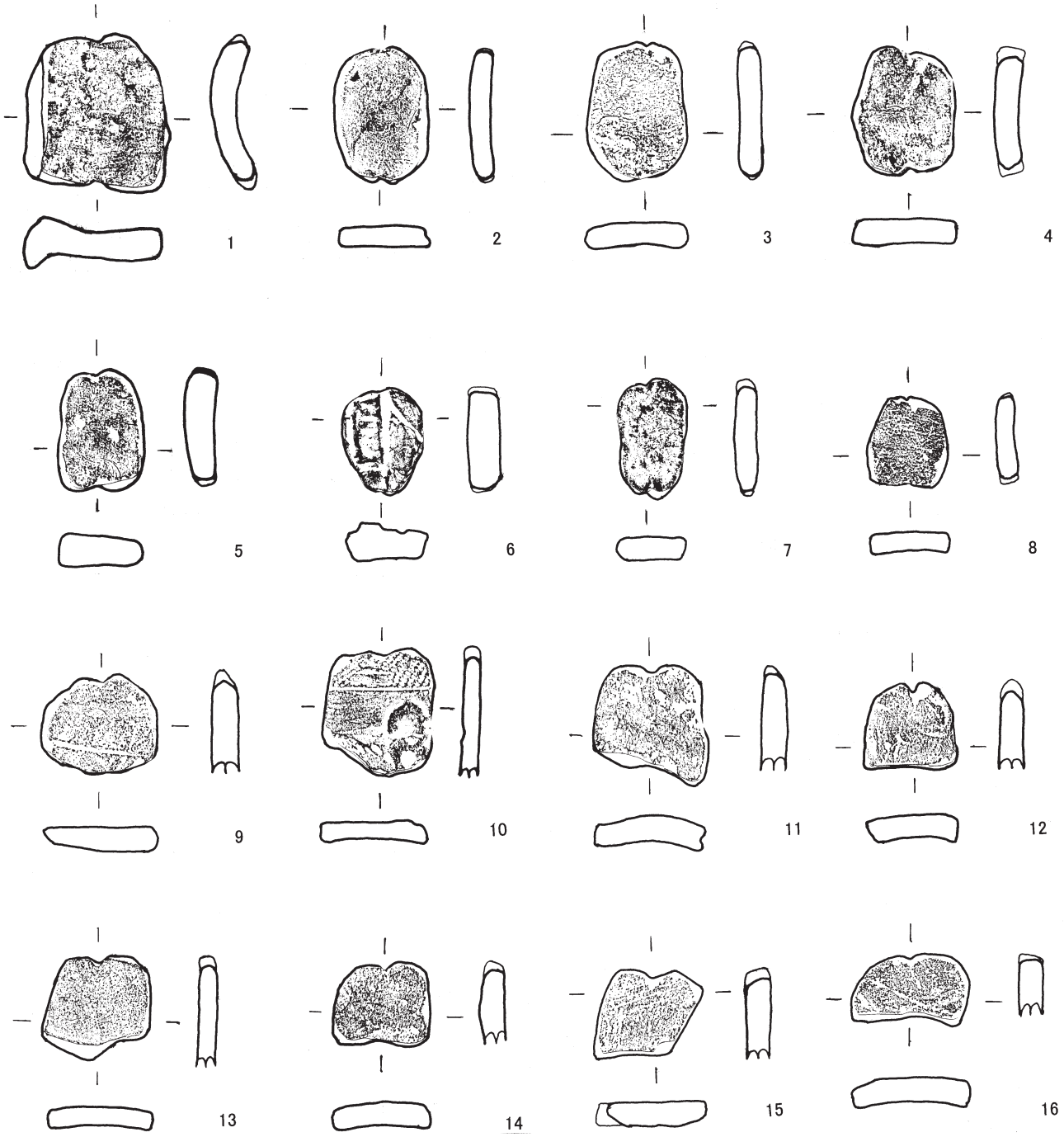
今回の８点の完形土器片錘の重量は**1**が92ｇと突出しているが、**2**～**8**は18～43ｇである。欠損品の中では**11**が比較的重いが、他は完形品並にあると推定され、魚網の錘として用いられたものと思われる。なお、1979年調査では完形品で10ｇ以下の軽量の土器片錘が２点出土しているが、今回は出土していない。

縄文時代中期以降の土器片錘は一般的に側面が整形されており、今回出土の土器片錘は堤貝塚の縄文時代後期と重なるものであると思われる。

第２表　土器片錘観察表

番号	長径(㎜)	短径(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	形態	切り込み 長軸	切り込み 短軸	糸掛け痕	素材 部位	素材 時期	遺存状態	備考
1	67	63	11	92	隅丸方形	2		明瞭	底部～胴		完形	
2	61	41	11	36	隅丸長方形	2		明瞭	胴		完形	
3	62	46	10	43	隅丸長方形	2		明瞭	胴		完形	
4	58	44	11	42	隅丸長方形	2		明瞭	胴		完形	
5	54	39	14	42	隅丸長方形	2		明瞭	胴		完形	
6	48	36	13	27	隅丸長方形	2			胴	堀之内	完形	刻み付き隆帯、沈線
7	52	31	10	22	隅丸長方形	2		明瞭	胴		完形	
8	40	35	9	18	隅丸長方形	2		明瞭	胴		完形	
9	*(43)	54	12	*(35)	隅丸長方形	*(1)		明瞭	胴		欠損	沈線
10	*(58)	46	7	*(33)	隅丸長方形	*(1)		明瞭	胴	堀之内2	欠損	8字状貼付文、沈線
11	*(53)	*(50)	12	*(41)	隅丸長方形	*(1)		明瞭	胴		欠損	
12	*(38)	41	11	*(22)	隅丸長方形	*(1)		明瞭	胴		欠損	
13	*(37)	48	8	*(25)	隅丸長方形	*(1)		明瞭	胴		欠損	
14	*(34)	44	10	*(22)	隅丸長方形	*(1)		明瞭	胴		欠損	
15	*(35)	*(40)	11	*(21)	隅丸長方形	*(1)		明瞭	胴		欠損	櫛描文
16	*(30)	53	10	*(25)	隅丸長方形	*(1)		明瞭	胴		欠損	沈線

＊(　)の括弧内の数値は残存値



第28図　土器片錘

0　10cm

①　⑥　⑩　⑮

第４章　石器（第29～32図）

出土した石器類54点の中から26点を取り上げ報告する。その内訳は打製石斧２点、叩石７点、石皿１点、磨石３点、凹石１点、石錘３点、軽石３点、黒曜石の剥片４点である。また用途が不明であるが、円筒状の半分に割れたものと石英製の小片が出土した。

（1）打製石斧

1、**2**とも分銅形で、ホルンフェルスが使われている。**1**は欠損しているため仕上がり形状は不明である。**2**はほぼ完形であるが刃の片面が良く磨かれており磨石としても利用されたと考えられる。

（2）叩石

3は立方体の形状で厚みがあり、叩き面が広いので大きなものを砕くのに使われたと考えられる。また叩き面を除く四面には凹みがある。**4**、**6**は細長い自然礫を用いたもので、先端部に叩き痕がある。**5**は幅広でやや厚く、上下に切欠きがある。**7**、**8**、**9**は比較的小さな丸い礫が使われている。

（3）磨石

10、**11**、**12** ともに大きな礫の一部を磨石として使ったようで、**10** は平面部に、**11** は円筒状の面に、**12** は円筒状の面の２か所に磨った跡が見られる。
特に **12** の磨り面は石の素肌が顕著に削れている。

（4）石皿

13 は緻密な黒っぽい石で平面が滑らかな傾斜をもって内側に凹んだ形状となっている。一部に物を置いて叩いた跡が見られる。

（5）凹石

14 は小礫の混じった石で凹石に使われたと考えられる。平面部の２面と側面の１面に凹みがある。

（6）半円筒形の破片

15 は円筒状の縦半分が残存したもので、緻密な黒っぽい石でできており、石棒などとして使われたかと考えられる茅ヶ崎では珍しいものである。

⑮

（7）石錘

16 はほぼ完形で大きな石を使っている。**17**、**18** は破損しているが同じように比較的大きなものである。

（8）その他

① 軽石

19 はほぼ球状で表面は滑らかになっている。**20**、**21** はやや凹凸をもつ形だが、**21** は良く磨かれた跡が見られ、磨石として使われたと考えられる。

② 石英

22 は三角錐のような形状で一部が欠損しているが表面は滑らかになっている。磨石として使われたものと考えられる。

㉒

③ 黒曜石

23、**24**、**25**、**26** は小さな剥片である。
石器を作った残りの剥片と考えられる。

②

③

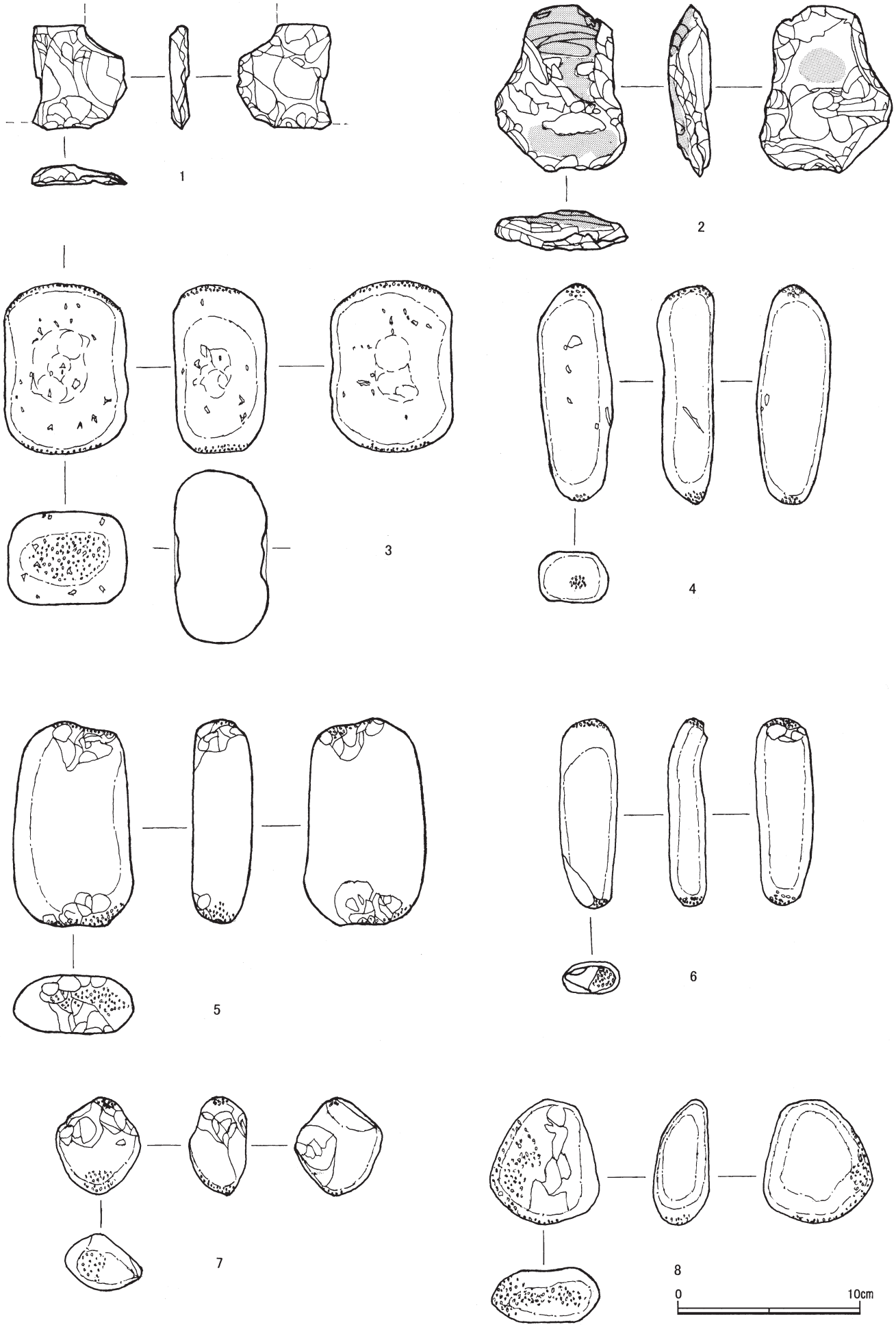
⑭

⑯

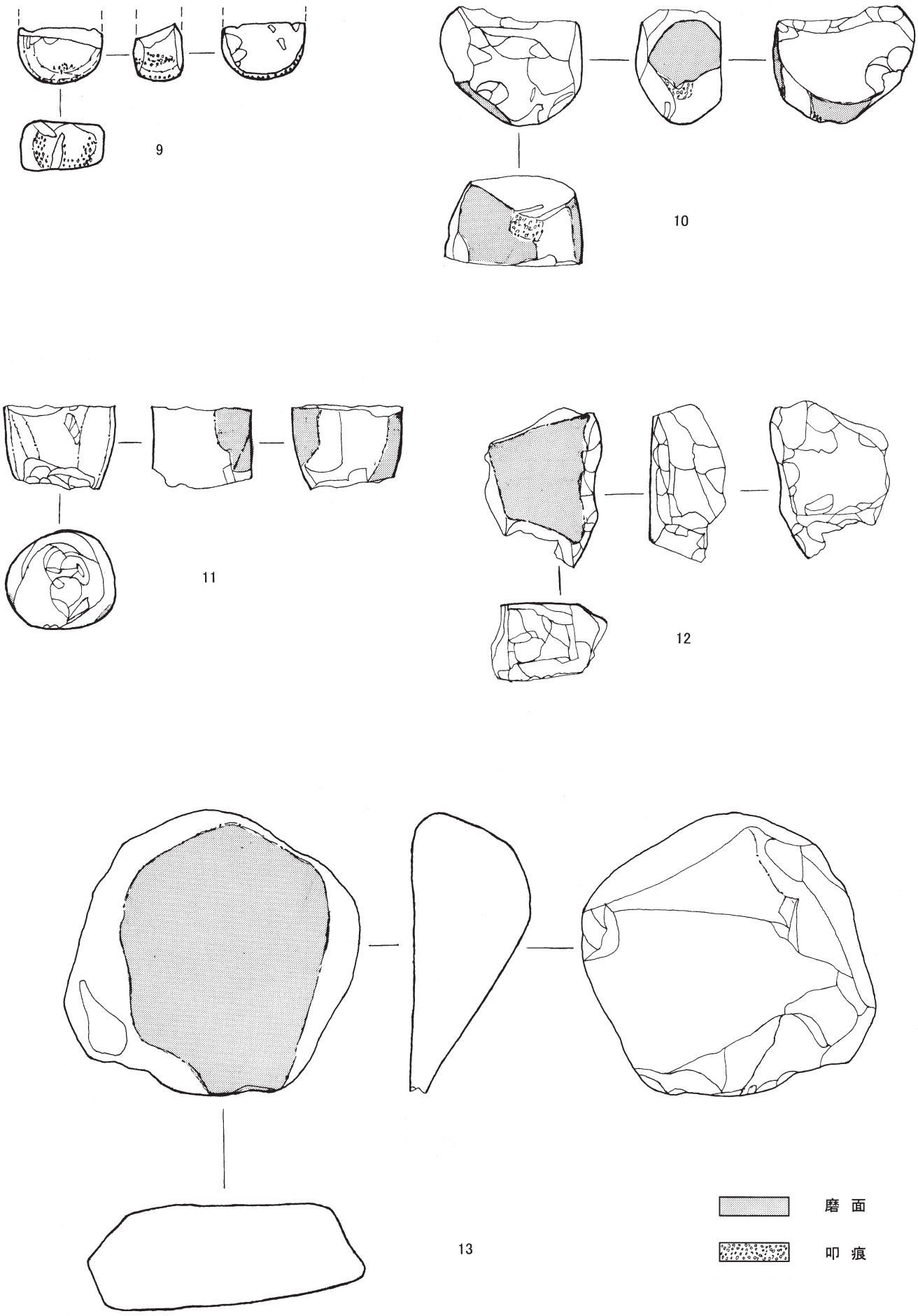
第３表　石器観察表

№.	器種名	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	残存状態	石　材	備　考
1	打製石斧	57.7	48.4	10.9	40			
2	打製石斧	92.8	69.1	10.5	164	ほぼ完形		磨石に転用
3	叩　石	93.0	66.1	49.8	555	完形		四面に凹みがある
4	叩　石	120.0	39.5	31.8	222	完形		
5	叩　石	113.6	65.8	32.0	402	完形		
6	叩　石	102.9	30.4	20.9	114	ほぼ完形		
7	叩　石	51.5	47.5	30.9	85	ほぼ完形		
8	叩　石	68.5	59.0	30.0	164	完形		
9	叩　石	44.4	26.4	28.2	55			
10	磨　石	76.2	59.6	45.5	308			円筒状
11	磨　石	52.8	59.2	45.6	252			円筒状
12	磨　石	85.5	63.2	41.2	272			
13	石　皿	151.0	135.4	64.2	1910	ほぼ完形		
14	凹　石	105.9	85.9	73.8	750			
15	不　明	48.7	24.2	14.8	21	一部		半円筒形で石棒などか
16	石　錘	138.2	96.6	30.0	560	完形		平面部にやや凹みがある
17	石　錘	103.0	81.4	21.1	217	1/4位		
18	石　錘	90.9	48.9	36.7	178	1/3位		
19	不　明	110.0	87.2	49.2	102	完形	軽石	
20	不　明	75.6	70.7	38.4	39		軽石	
21	磨　石	80.0	67.0	56.8	55	完形	軽石	
22	磨　石	33.1	23.9	20.8	13	ほぼ完形	石英	
23	剥　片	26.2	23.6	12.2	8.0		黒曜石	
24	剥　片	32.0	18.5	6.2	3.0		黒曜石	
25	剥　片	22.3	18.1	4.4	2.0		黒曜石	
26	剥　片	18.9	11.9	5.4	1.0		黒曜石	

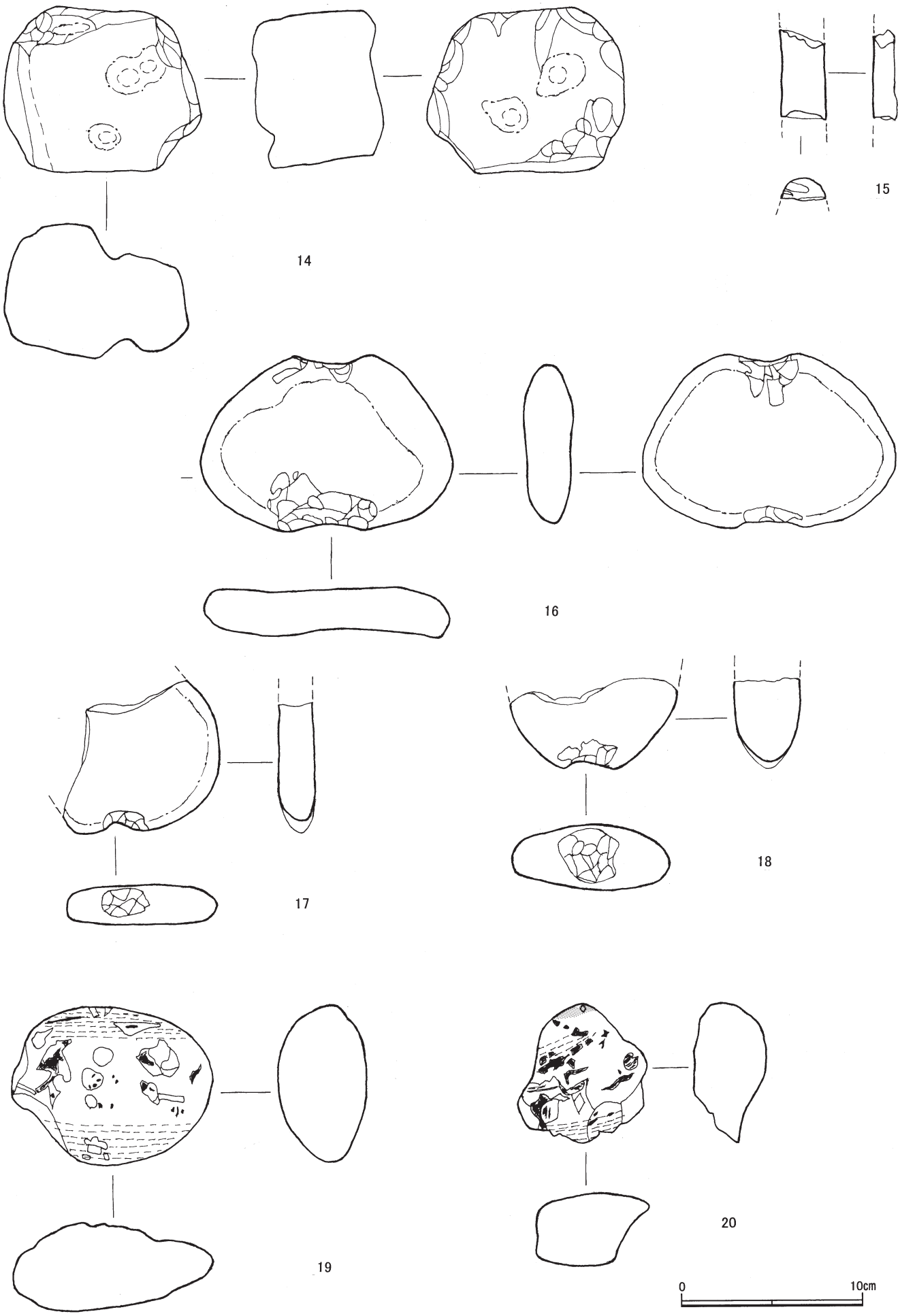
（注：寸法、重量は現存している状態での値を示す。）



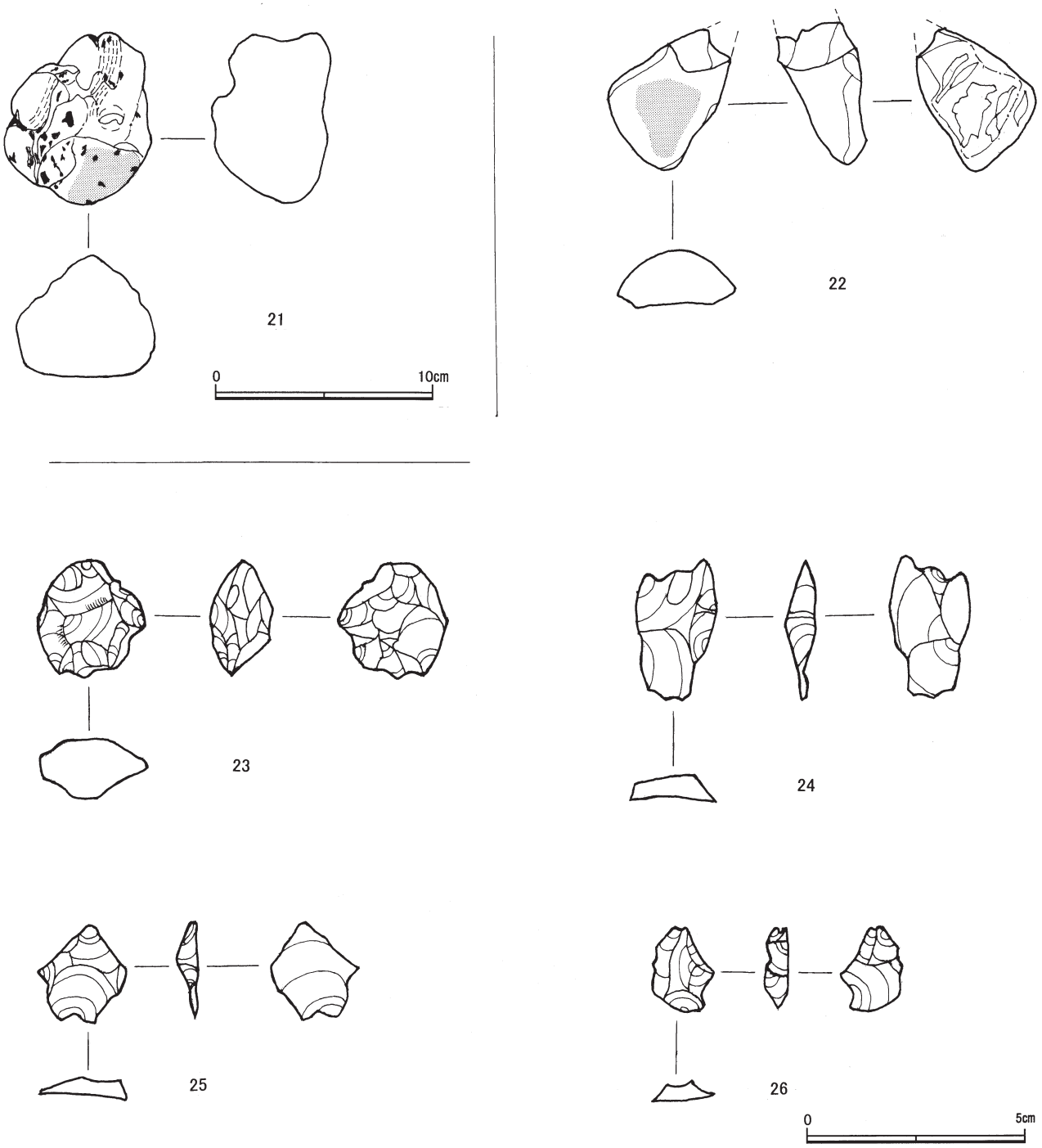
第29図　石器（1）



第30図　石器（2）



第31図　石器（3）



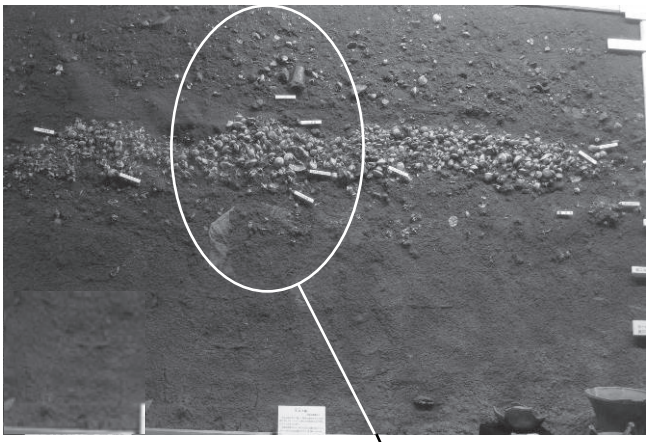
第32図　石器（4）

第５章　貝層のはぎとり

堤貝塚の調査においては多くの貝が出土し、前回までの報告書で貝の種類や貝層の分布について報告されている。(参考文献を参照)

今回の調査では堤貝塚の貝層が良く観察できる部分に遭遇したので、‘貝層のはぎとり’として保存し展示することを目的に、調査区トレンチの北側と南側の２か所で剥ぎ取りを実施している。

考古資料整理グループでは、剥ぎ取り作業を見学することができた会員の撮影した写真が残されていたので、‘貝層のはぎとり’ができるまでを記録として残すことにした。



2階展示室の‘貝層のはぎとり’

堤貝塚から出土した貝の多くはダンベイキサゴであると報告されているが、現在、文化資料館で展示中の‘貝層のはぎとり’からも巻貝のダンベイキサゴが多いことがわかる。また二枚貝のチョウセンハマグリなどと魚骨なども混ざっていることが確認できる。

貝層の上は撹乱されているが、注口土器の注口部などが見られる。

‘貝層のはぎとり’採取日：1982 年８月６日

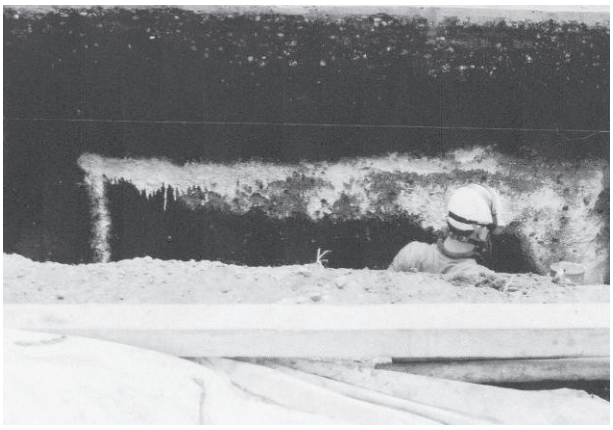
第４表　‘貝層のはぎとり’の内訳

はぎとり	調査グリッド区	採取場所	高さ（cm）×長さ(cm)	地表面下(cm)	保管
A	2、3	北側西壁	140　×　230	80	展示中（２階）
B	11、12、13	南側東壁	135　×　390	100	一部展示中（１階）

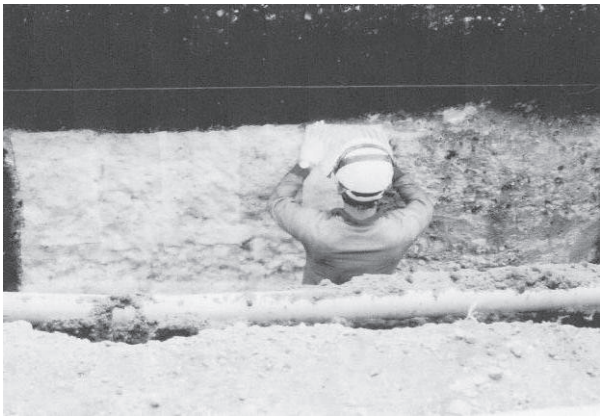
‘貝層のはぎとり’ができるまで

①南側（テニスコート側）の掘削開始

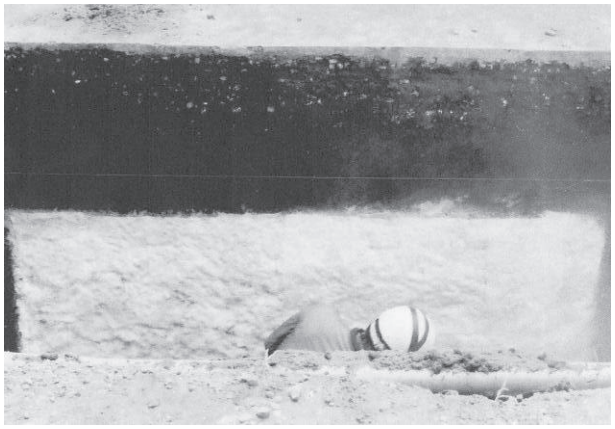
②発掘調査開始



③合成樹脂製の強力接着剤を貝層に吹き付ける

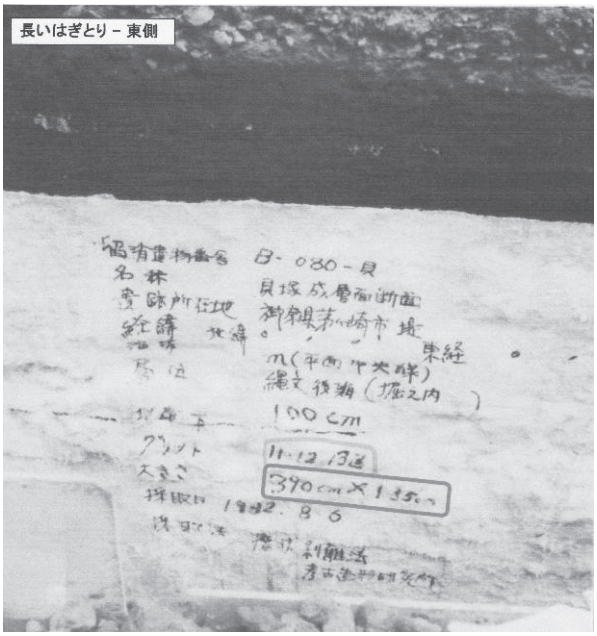


④その上にグラスウールを貼る

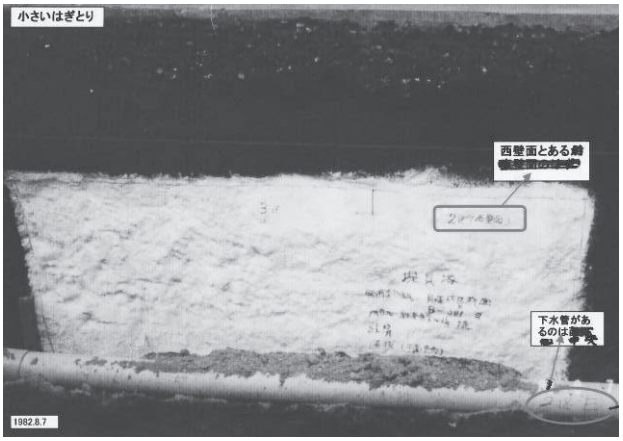


⑤再度接着剤を吹き付ける

⑥形を整える



南側東壁面の‘貝層はぎとり’(データ部拡大)



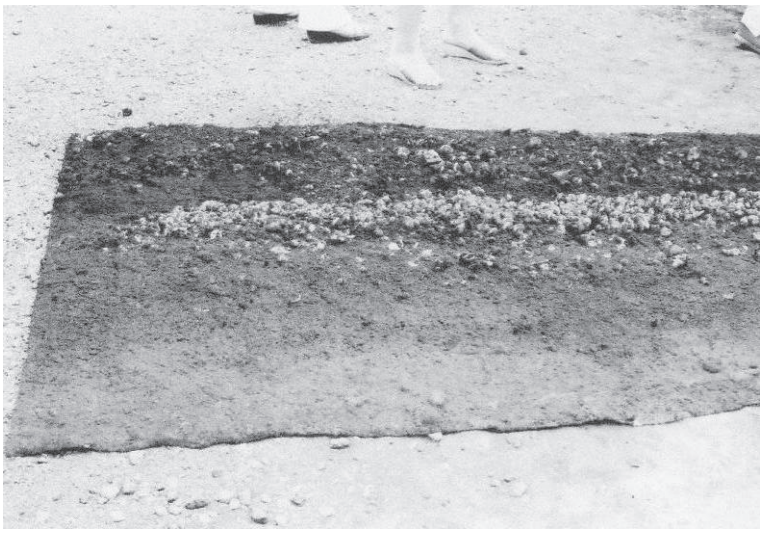
北側西壁面の‘貝層はぎとり’(全体)

⑦取り上げる前に、表面に必要なデータを書き込む

⑧‘貝層のはぎとり’を剥がす

⑨地上に取り出す

⑩‘貝層のはぎとり’の仕上がり状況を確認



⑪余分な土を洗い落として、できあがり

おわりに

今回の調査は、堤貝塚の西貝塚で、台地西端をほぼ南北に縦断する舗装された道路下の調査である。下水道管の取り替え工事に伴う発掘調査であるためトレンチ幅1.5mのほぼ中央には直径約20㎝の旧下水道管が埋設されていた。そのため攪乱部分が多く、遺構などの確認も困難な状況であったことがうかがわれる。

しかしトレンチ東壁・西壁にはほぼ全域にわたって貝層が認められた。その良好な２か所の貝層のはぎとりができたことは今回の大きな成果であると考えられる。

そのような厳しい状況であったため保管されていた出土遺物は、出土地点が明確でないものが多いが、堤貝塚の台地西端を南北に34mの長さにわたり調査したのは、堤貝塚の全容を解明するうえで重要な役割を果たすものと考えられる。また、トレンチの南側で引き続き行われた下水道関連工事の立ち会い調査でも、貝層範囲から外れてはいるが、遺物が出土している。ここではトレンチ調査と立ち会い調査の出土遺物を一括して整理し、報告することになった。

出土数と報告対象とした数の関係をみると土器類は総数2,149個のうち183個、石器および礫は54個のうち26個であった。また報告から外したが貝類が326個、特定されない骨片が16個あった。

土器についてみると、縄文時代草創期・早期の土器は出土していないが、前期・中期の土器は僅かに出土している。際だって多いのは後期の土器である。また古代以降の土器も少し出土している。

堤貝塚は過去の調査で縄文時代後期の遺跡であるとされている。これまでの西貝塚の調査は貝層推定範囲の南半分ではあるが、今回も多いのは後期前半の称名寺式土器、堀之内式土器、加曽利B式土器である。なかでも堀之内式土器が特に多く、型式を特定できる土器のうち80%余を占める。そのうち堀之内１式土器が３分の２を占め、１式の終末期か、堀之内２式期への過渡期のものが幾つか見られる。

前期の土器は縄文が施された繊維土器と思われる。（第４図）。

中期の土器は勝坂式文様の中にキャタピラ文、太陽文、渦巻き文などが見られる。（第５図）

称名寺式土器は出土例が少なかったが、前回に続き今回も出土していて、堤貝塚でこの時期から人の活動があったと考えられる。堀之内１式につながるような沈線の間の刺突、隆帯に刺突が見られる。（第６図）また突起部の項で記載した中に称名寺式の特徴的な文様をもつものがある。（第25図①、②）

堀之内１式土器は大きく分けて次の三つの形状が見られる。

① 浅鉢形土器で、称名寺式期からの過渡期のものとも考えられ、口縁上部が強く内側に屈曲した幅広の面に文様帯を持っている。（第７図①～⑤）そのうち１個体は短い注口と突起が口縁の文様帯に付帯した注口付浅鉢形土器である。（第７図②、③）堤貝塚では今までに類を見ない特徴ある存在と思われる。

② 頸部でくびれ胴部でふくらむ鉢で、頸部に無文帯をもち、堀之内１式終末期に相当する。２個体が復元でき、同じ器形と推定出来る土器片が幾つかあり目立つ存在である。今回出土の堀之内１式土器の特徴ある器形の一つと思われる。

（第10図、12図、復元土器は第９図①、第11図①）

③ 朝顔形土器で、均整が取れている堀之内１式終末期のものである。（第11図④）

堀之内２式土器はこれまでの報告に比べて少ないが、復元された土器が３個体あり、ほぼ全容が捉えられる土器もある。その中に、頸部より外反し、土器内面の下半が球形に整えられている鉢が２個体ある。また深鉢形土器で内面に花形の文様をもつものもある。

文様では、三角文が多く見られるが、隆帯に連鎖状の刻みをもつものが多いのも特徴であろう。

（復元土器は第 13 図①、第 16 図①、第 17 図②、鉢形土器は第 13 図①、第 14 図①、内面に花形文様は第 16 図①、三角文は第 14 図と第 17 図、隆帯は第 15～17 図）

加曽利Ｂ式土器はこれまでの報告の中では数量がやや多いと思われる。丁寧な器面調整の精製土器が目立ち、中でも口縁部が内湾し沈線間に刻み目をもつ小形の鉢（第 19 図⑦）と、長い頸部と高台のような底部、胴部下方に最大径をもつ注口土器（第 24 図⑩）は格別である。

注口土器では、前掲の土器（第 24 図⑩）の復元過程で注口部の装着痕、底部から胴部を輪積みした跡、手で押さえた跡など注口土器の製作技法の一部が確認できた。また注口部で根元の筒状粘土の上に長い筒状の粘土を被せているもの（第 23 図⑥）も確認された。

把手・突起部では、称名寺式土器によく見られる胴部でくびれ、口縁部に向かって大きく外反しながら４つの波状口縁をもつ深鉢の突起部（第 25 図①）が出土している。堤貝塚のこれまでの調査では報告されていないので今回が初めての出土である。

土器底部では、素材３～４本並べたものを１単位として２越え２潜り１送りに編んだ網代痕のある底部（第 26 図⑪）、不特定な直線状圧痕および木葉痕と思われる底部（第 26 図⑫および⑬）も出土した。

中世の遺物は、1979 年調査で報告した常滑焼の大甕の破片２点以来の出土である。今回の調査でも瓦質土器片と青磁器片の２点のみであるため、他所からの混入品と言えなくもない。しかし過去に、この堤の台地上で中世の地下式坑が発見された記録*もあり、中世の人々の営みがあった可能性も否定できない。（第 27 図④、⑤）

＊：「堤郷と吉田家」池田鉄七　昭和 63 年

土器片錘は土器の二次使用としてのものが今回 16 点出土した。その中に土器底部から胴部にかけての部位を用いたものが１点（第 28 図①）出土している。一般的に底部を用いた土器片錘は少ないとされており、堤貝塚でも初めての出土であり貴重なものといえる。

石器は、堤貝塚では珍しい縦に割れた半円筒形の黒くて硬い緻密な石器と三角錐状の磨かれたような小さな石英の塊が出土した。用途は不明だが、半円筒形の石器は石棒などに、また石英は磨石などとして使われたものとも考えられる。（半円筒形は第 31 図⑮、石英は第 32 図㉒）

自然遺物の貝類は、剥ぎ取った貝層以外から採集されているが、全体の個体数、種類とも少なく、巻貝５種類、二枚貝５種類で合計 300 個体であった。その内訳はダンベイキサゴが多く、ホソヤツメタガイ、チョウセンハマグリが少々あり、その他にボウシュウボラ、バイ、トカシオリイレボラ、サトウガイ、シオフキガイ、コタマガイ、ワスレガイが僅かに残されていた。

参考文献

・赤星直忠　1973　「小出の堤貝塚」『郷土茅ヶ崎　上巻』　茅ヶ崎市教育委員会（堤貝塚 第 1,2 回調査）
・岡本 勇　1963 『茅ヶ崎市文化財資料　第二集』 茅ヶ崎市教育委員会　（堤貝塚 第 4,5 回調査）
（茅ヶ崎市教育委員会　1981　『茅ヶ崎の遺跡　茅ヶ崎市文化財資料集　第八集』に再録）
・考古資料整理グループ　2008　『堤貝塚　文化資料館調査研究報告 16
（1959、62 年調査の出土資料整理報告）』　茅ヶ崎市文化資料館　（堤貝塚 第 4,5 回調査）
・考古資料整理グループ・茅ヶ崎市教育委員会　2000　『堤貝塚　茅ヶ崎市文化財資料集　第 13 集』
茅ヶ崎市教育委員会　（堤貝塚 第 6 回調査）
・大村浩司　2000　『茅ヶ崎市遺跡調査発表会 11』 茅ヶ崎市教育委員会　（堤貝塚 第 8 回調査）
・大村浩司　2001　『茅ヶ崎市遺跡調査発表会 12』 茅ヶ崎市教育委員会　（堤貝塚 第 9 回調査）
・考古資料整理グループ　2002『文化資料館調査研究報告 10（1979 年調査の関連遺物）』
・考古資料整理グループ　2004『文化資料館調査研究報告 12（1979 年調査の関連遺物）』
・岡本 勇　1973 「堤貝塚の調査」『郷土茅ヶ崎　上巻』 茅ヶ崎市教育委員会
・石井　寛　1990　「称名寺式土器に関する研究史」『調査研究集録　第 7 冊』
横浜市埋蔵文化財センター
・石井 寛　1982　「南関東西南部」『シンポジウム堀之内式資料集』　市立市川考古博物館
・松田光太郎　2002　『稲荷山貝塚』財団法人かながわ考古学財団
・野口義磨編　1981　『縄文土器大成　後期』講談社

＊茅ヶ崎市文化資料館考古資料整理グループ
池上升也、岩本和代、緒方隆、岡部忠昭、織田敏雍、釘宮靖弘、小林晁、佐野重明、田中節夫、寺岡早苗、藤平博行、土橋梢、山口礼子、我妻美枝子、渡邉保子